

斬魄刀を持って鬼退
治！！

みるくていー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人々は言った

曰く、その剣士は、

時折刀身が消え桜が舞い落ちる頃には鬼の首が落ちる

曰く、その剣士に、斬られた鬼は

立ち待ち、氷に覆われ砕け散ると

曰く、その剣士は、不思議な術が使えると

曰く、その剣士は

女子の容姿なのに、男であると

様々な噂が飛び交う中

今日も鬼を退治する、人を護るために

目次

第1話	1
斬魄刀を持って鬼退治!! 2話	10
斬魄刀を持って鬼退治!! 3話	34
斬魄刀を持って鬼退治!! 4話	53
斬魄刀を持って鬼退治!! 5話	72
斬魄刀を持って鬼退治!! 6話	98
斬魄刀を持って鬼退治!! 7話	127
斬魄刀を持って鬼退治!! 8話	141

第1話

?? 「……………」

なんだここ…何にもない真つ白な空間

神様 「おお…気がついたか…」

そう自分に話しかけて来たのは

長髪で白髪の御老人…髭長くね？

神様 「ほっほっほ♪神様と言ったら

長く白い髭じゃろ？」

…：…知らんよ…

神様 「何じやつれないのおー」

?? 「……………」パクパク

…：…ん…あれ、可笑しいな、声がでない

神様 「そりゃそうじゃお主もう

死んだるからのー」

…死んでるのか…!!え?!死んでる？

何で!!

神様「お主病気で20になる手前で亡くなつて
しもうたんじゃよ」

……そうか…俺は…死んでしまったのか

神様「女子なのに俺とは

なかなか変わった娘よのー」

………は?

神様「いや、女子は

一人称が「私」ではないのかの?」

………おいこの糞ジジイ

神様「なっ!!

口まで悪いとは!!

お主はそれでも女子か?!

………うるせー!俺は男だっ!!

神様「いや、お主よ何を言う

身長が153cmで目も大きく愛敬がある子を

男子だと?」

………いや！まじで男だから！

見えてきて！俺の過去を見てきて！！

神様「分かった！分かった！

全く…どれどれ

えーと、

名前は………で………」

………全く…しかし死んだのか………」

お母さん…お父さん………」

お母さん「どうしたの？そんなに泣いてー

また、女の子みたいていじめられたの？

大丈夫よおいで？」

お父さん「はっはっは！

………母さんちよつとそいつら締めてくるわ」

お母さん「もう！貴方ったら！」

………ごめんなさい…ごめんなさい………」

神様「すまぬ!!!」

……ぬわああああ!!

てめー！この△○？□！！

神様「なんじやなんじや！

落ち着け！！」

…：ハーーハーーハーー：ふー

それで俺が男だつて分かつた？

神様「ああ！本当にすまぬなー…」

…：いいよもう…言われ慣れてるから

お母さん「○○ちやーん♪♡♡

次はこの服着てみてー！♡♡」

…ゾクッ

神様「どうしたかの？」

…：いや、何でもないです…

それで死んだ俺がなぜここに？

神様「ああ…忘れておつたわ」

…：忘れんなよこのバカジジイめ…

神様「…ちよくちよく口悪くなるの

やめて？儂泣いちゃうよ？」

…分かった分かった！謝るから

それで俺は地獄？それとも天国？

神様「いや、お主には転生をしてもらおうぞ」

…転生？それって何ですか？

輪廻転生とは、違うのですか？

神様「うむ…輪廻転生は同じ世の中だが

お主には別の世界へ行ってもらおう」

…別の世界?!

神様「お主は漫画を読むかの？」

…漫画か…BLEACHを読んでたくらいだな…

神様「ぶりー？」

…ぶりーちっすね…

神様「なるほどのー…それは刀を使うかの？」

…ええまあ使いますね…

中には槍なども居ますけど…基本は刀です

神様「それなら丁度良い

お主には「鬼滅の刃」と言う漫画の世界に

転生してもらう

そこでは、鬼と呼ばれる存在が人々を喰い

その鬼から人々を護る人間達の話じゃ」

……読んだことないけど興味は出てきましたが

鬼が出たら俺は一溜りもないのでは？

神様「案ずるな…

お主には特典をやろう…

お主はその、えーと、何て漫画じやったつけ？」

……ブリーチっす…

神様「おお！すまん！すまん！

横文字は難しくてのー！笑

んゝん！

そのブリーチの力を何個か授けよう…」

……まじか…

んー……んー…

よし！決まりました!!!

神様「おっ何じゃ？」

……これって3ついいですか？

神様「構わぬよ」

なら

…朽木白哉の千本桜

…日番谷冬獅郎の氷輪丸

…そして、鬼道

これでお願ひします！

神様「なるほど…なるほど…

あいわかった…

容姿はどうするのかの？

女子に間違われて苦労してきたのだろう？

男の様に逞しい身体に変えるかの？」

………そうですね…

お母さん「○○ちゃんは可愛いし優しくて

お母さん大好きよ♡」

お父さん「そうだな！優しい事は弱さではない！

人の痛みも分かるいい子だ！父さんも大好きだぞ」

両親「桜歌」

……ふふ♪♪……

容姿はこのままで……

神様「分かった……

お主が10歳の時に記憶が戻るようにしておこう」

……ありがとう神様！

神様「うむ！それではな！

2回目の人生楽しんでくれ！」

……はい!!

お世話になりましたー!!! (▽、?) ニコッ

そうして意識が遠のいて行った……

神様「最後の笑顔可愛い過ぎるじやろ……

本当に女子でないのが信じられん……」

桜歌の可愛いさにやれた犠牲がまた増えた!!

桜歌の可愛いさに、

前世の男の同級生は、照れ隠しで

つい強い言葉を言ってしまうただけだと言うことを

桜歌は知る由もないだろう…頑張れ!

l l l l t o b e c o n t i n u e d l l

斬魄刀を持って鬼退治!! 2話

チュン…チュン…

んん…眩しい…

?? 「桜歌…桜歌…」

誰か…呼んでる…?

ググツ…あれ…身体が動かない…

??・?? 「おう…桜歌…」

わ…ちの…よ…の…だ…も…で…」

何か言ってる…なんだ、

遠くの方に何かいる…

?? 「桜歌…」

鎧武者に

?? 「桜歌よ…」

氷の龍?

母「桜歌!!!」

桜歌「……はっ!!」バツ!!

キヨロキヨロ…

桜歌（さっきのは夢？

もしかしたら…）

母「桜歌もう身体の調子は良いの？

3日も熱が引かなくて心配したのよ？」

桜歌「うん♪大丈夫だよお母さん」

母「そうなら良かったわ♪

お母さんお粥作って来るわね！」

桜歌「うん!!」

そっか…思い出した…

転生したんだっけ…

桜歌「んー!!! アイテテ…ふー」

あつ俺の名前は

鈴燈桜歌りんどうおんかです！

どうやら無事、前世の事も思い出せました！

起きて鏡を覗いてみる

桜歌「髪の色ピンクや……」

何でピンク…そして

桜歌「この着物も…」

桜の柄って!!

これ!女の子用だよね!!

何でこれ着てるの?!

母「だって桜歌女の子みたいだし♪」

だし♪♪じゃねー!!

俺は男だよ?

母「ん?」ニコツ

あつ何でもないですー

ぐっおおまた、

男なのに女の子扱いされてしまうー!

前世より少しでも、

男らしくしないと!!

??「ごめんくださいー!!」

母「はーいーい!!」

あら、善子さん? どうなさったの?」

善子「聞いた? 竈門さんの事」

母「聞きました聞きました……」

何でも熊とか獣に襲われたんですって?

恐ろしいわねー」

善子「そうなのよー!」

それでね? 炭治郎君と彌豆子ちゃんの

遺体だけがどこ探しても無いらしいのよねー」

母「まあそうなんですの??」

竈門さん家の炭は良かったから

残念だわー……」

善子「そうねー……」

あつ、後ね!」

……長くなりそうだな……

神様「その世界では鬼が人を喰らう……」

唐突に神様が言っていた事を思い出した

桜歌「鬼……」

……カタツ……

ん？家の刀が今動いたような？

気のせいかな？

鬼って言われてもなー

桃太郎の鬼しか知らないし

人を食べるってどうしてだろう……

善子「じゃまた」

母「ええ♪また」

あつ話終わったかな

母「お待たせー！お粥食べて今日はもう

早く寝ないとダメよ？」

桜歌「はい！いただきます！」

パクツモグモグ……

桜歌「美味しい！」ニコツ

母「相変わらず女の子みたいね♪」

桜歌「それ褒めてるの？」

母「ええ♪褒めてるわよー♡♡

それじゃあお母さん洗濯物やってくるわね♪」

桜歌「はーい！」

母「この調子で元気になって、お店も手伝ってね？」

桜歌「分かったー！」

俺の家は地元でも珍しい

花屋をやっている…正直春夏は蜂が凄い来るので

店番の時は嫌だー!!

父「おうー！帰ったぞー!!」

母「あらお帰りー！今日は早かったのね？」

父「まあな…：：：竈門さん家の事があってから

夜遅くまでやるのは辞めにしたんだよ」

父は剣道の先生をしている

割と強いらしい…

父「桜歌は？」

母「起きてご飯食べてるわよ♪」

父「そうか…」

父「桜歌入るぞ？」

桜歌「んー？いいよー！」

スー：

父「体調は大丈夫なのか？」

桜歌「大丈夫だよー！！」

父「そうか…良かったよ

最近熊や獣が起き出している

桜歌も気をつけろよ？」

桜歌「はーい！！」

ねーねーお父さん…

鬼つていると、思う？」

父「鬼？」

はは！御伽話じゃないんだし

鬼なんか居ないよ！

もし居たら俺がやつつけてやるさ！」

桜歌「おおー！お父さんかっこいいー！」

そうだよ、ここには来ないはず

平和に暮らして、平和に死のう……

桜歌「ふうご馳走様ー!!」

母「あら桜歌どこ行くの？」

桜歌「ちよつと外の空気吸ってくるー!!」

母「あまり遠くに行つてはダメよ？」

桜歌「うんー!!」

ガララ……

桜歌「んーー!!気持ちいいー!!」

田舎の空気は美味しいってよく聞いたけど

落ち着くなー!!

おばさん「おや、桜歌ちゃん

今日も別嬪さんねー♪」

桜歌「もーー!!おばさん!

俺は男だよー?」

おばさん「え?ああ綺麗な顔だから

間違えちまつたよー」

桜歌「もう」プクー

おばさん「ニクガヤワラカクテウマソウダ…」ジユル

桜歌「おばさん？何か言っ…た？」

おばさんは唐突と姿を消していた…

桜歌「……………？」

キヨロキヨロ…

桜歌「あれ？おばさん何処だ？」ブルル！

桜歌「はっ、早く家に戻ろ！」

タツタツタツ…

おばさん↓三ツ目鬼「くくく…もう我慢できぬ

久しぶりの稀血じゃ…くくく」

はあはあはあ…

ガララ！

桜歌「ただいま!!!」

母・父「!!」

父「どうした桜歌そんなに慌てて」

母「ああびつくりした

お母さん心臓が飛び出る所だったわよ？」

桜歌「おば!おば!」

父「おば?」

桜歌「おばさんが突然消えたんだ!!」

父「??何を言ってるんだ桜歌」

桜歌「本当にきえたんだって!

話したら急に!!!」

父「おばさんおばさんって

桜歌そのおばさんって誰だ?」

桜歌「え?誰って::

::::誰だ?」

父「ハハハハハ!!」

狐か狸に化かされたか?」

母「もう桜歌ったら!ふふふ」

桜歌「ええー::そうなのかな?」

桜歌(でも、確かに話してたもん。)

母「しかもそんなに着物を乱して

女の子なんだからキチンとしなさい??」

桜歌「俺は男だから!!」

母「??」クビカシゲ

桜歌「いや!何言ってるの?見たいな顔しないで!」

母「ふふ♪冗談よ♪さつご飯にしましょう♪♪」

桜歌「もう!」プクー

父「ハハハハハ!桜歌は本当に可愛いなー!」

桜歌「きやー!お父さん急に抱っこは

やめてー!!」

鈴燈家「あははははは♪♪」

カサカサ……カサカサ

三ツ目鬼「くくく……くくく……

稀血……稀血……

稀血さえ食べれば私もあのお方に

褒めて頂ける……血を分けて頂ける……

だから……お前は……」

鈴燈家「あははははは♪」

桜歌「お母さんの料理美味しいよー!」

三ツ目鬼「お前は……」

桜歌「モグモグ♪」

……カタカタ!……

三ツ目鬼「私にー!!!」

桜歌「モグモグ♪」

……カタカタ!

ガシヤン!!

鈴燈家「!!!」

母「え?」

父「刀が落ちたな?」

桜歌「……」

桜歌「お母さん俺が直し……」

三ツ目鬼「お前は私に喰われろー!!」に!

うわあああ!!!

ドゴーーー!!!

母「きやあああ!!!?!!!」

父「なに?!!」

桜歌「ぐあああ!!」 ミシミシ!!

桜歌（な、なんだ！早くて見えなかった！
なんだコイツ！）

三ツ目鬼「くくくく！稀血だー！

小娘ー!!くくくく」

桜歌「ぐっ…うぐ！」 ミシミシ

桜歌（力が強くて抜け出せない!!）

母「ああー！桜歌!!」

父「くっ！桜歌を離せ！化け物め！」

父は刀を取り鞘を抜き化け物に斬りかかる！

……が!

ガキイン!!!

父「なんだと!!」

まるで金属にでも当たったかのような

高い音が鳴り響くだけで鬼にはかすり傷一つ

付いていたかった!!

父（硬い！こっちの手が痺れそうだ！）

桜歌「ぐああ!!」ゴフツ

母「ああ」パタ…

父「母さん!! くっ 桜歌を離せと言っている!!」

三ツ目鬼「ああん? 飯が喋るな

お前の子は稀血だからな…

ゆつくり味わないとなー! ♪くくくく」

父「飯だと! それにさつきから

稀血稀血となんの事だ!!」

三ツ目鬼「だーかーらー!」

飯が喋るなど言ってるだろーが!!」

ブンっと鬼は軽く振りかぶっただけなのだが

人にとっては

父「ぐおおおー!!!」ぶしゅっ

まるで鋭い刃物に斬られたようである

桜歌「どお、ざん、!」

ジタバタ! ジタバタ!

桜歌(この! 離せ!)

三ツ目鬼「慌てるな慌てるな……」

お前は私の体の一部になるのだ……くくく」

桜歌（くそそ!! 何かないのか! 何か!）

父「桜歌……」

三ツ目鬼「くくくくくく!!!」

桜歌（くそそ! くそそ! くそそ!）

桜歌（死ぬ! 俺が! 折角転生した記憶も戻ったのに

……）

三ツ目鬼「くくくくくく小娘……諦めたのか?」

人間らしく醜く騰かないのか?」

桜歌「……」

父「ゴフツ! 桜歌……」ズルズル

ガシツ!

三ツ目鬼「ああ?」

父「桜歌を離しやがれ……」

三ツ目鬼「……邪魔だ……」

桜歌（やばいやばいやばいやばいやばい!）

このままじゃどうしよう! どうしよう!
何かないのか! 何か!

三ツ目鬼「稀血から喰おうと思ったが…」

桜歌（何か! 何か! 何か!）

父「ゴフツ…ハアハア

桜歌はな…誰にでも優しくて

愛嬌も良くてな…家の手伝いもしてくれるし

俺には勿体無いくらいの子なんだよ…」

桜歌（お父さん!）

三ツ目鬼「うるさい奴から喰ってしまおう…」

父「てめーみたいな化け物の飯にされて

たまるかよ…」

桜歌（…力があつたら俺に

何か力が…力? そうか! 刀がないなら!）

三ツ目鬼「こいつを喰ってから

ゆつくり稀血を頂こう…」

桜歌（動け俺の腕!）

スッ！

三ツ目鬼「ああ？何のつもりだ？小娘」

桜歌「お、俺は小娘じゃねー！男だー！

破道の三十一！赤火砲!!!」

カッツツツ!!ドゴーーーーーン!!!

三ツ目鬼「ぐおおおー!!!」

ドサツ！

桜歌「……ぐあ！……ハアハアやったぞ！

出たぞ!!ハアハア」

桜歌（完全詠唱じゃないから威力は弱いけど）

父「お、桜歌……」

桜歌「お父さん!!!」

父「今のお前に何があつたのは

わからねーが……とりあえず助かって良かった……」

桜歌「うん！うん！早く逃げよ！」

父「ダメだ……桜歌だけ逃げろ」

桜歌「なんで！嫌だよ！」

父「俺はもう足に感覚がない……」

桜歌「そんな！なら俺がおぶって！」

父「バカ！子供が大人を運べる訳ないだろ！

早く逃げろ！」

三ツ目鬼「おのれ！おのれ！おのれ！おのれおのれ……！」

よくも！小娘……！よくも……！」

桜歌「再生してきてる！」

父「早くしろ!!」

桜歌……お前なら大丈夫だ！

誰にでも優しく強いお前ならきつと

俺達が居なくても生きていける！」

桜歌「お父さん……」グスツ

父「泣くな桜歌……」

友達を作れ仲間を作れ

1人でも寂しくないように

大丈夫だ……大丈夫だぞ桜歌……

お前は俺達の息子だ……

希望を持ちながら生きるんだ

そしたら、きつといい事がある

辛くてもそれを糧にしろ

経験にしろ、そして誰にも負けないくらいに

立派に強い大人になってから

俺達の墓参りに来い……いいな？」

桜歌「……うん！」

父「刀を持って走れ桜歌：

振り返るな走れ走り続けろ」

三ツ目鬼「おのれ！飯の分際で……！！」

父「行け……！！桜歌！！」

桜歌「うう……」ダッ

三ツ目鬼「逃がすか……！！」

ガシッ！！

父「行かせるわけねーだろーが！」

三ツ目鬼「またしても人間め！」

父「早く行け！！」

桜歌「ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!」

タツタツタツ!タツタツタツ!

三ツ目鬼「くそ!この離せ!!

はな!!!!」

父「……………」

三ツ目鬼「こ、こいつ…死んでる……

死んでも尚私を行かせまいと

くくく…人間とは何と脆い事か…くくく」

桜歌 s i d e e r

ハアハア!ハアハア!

肺が痛い息がしづらい

刀が重い……

お父さん…お母さんごめんなさいごめんなさい……

桜歌「あっ!!」

ズザっ…

桜歌「ぐ、いてて…はあはあはあ」

ここまで来たらもう大丈夫だよな……

桜歌「お父さん…お母さん…」

三ツ目鬼「ここに居たか…稀血」

桜歌「!!!」

三ツ目鬼「あまり私を困らせるなよ…

私はただ飯を喰いたいだけのさ」

桜歌「お、お母さんとお父さんはどうした…」

桜歌（やめろやめろ…言うな）

三ツ目鬼「ああ?そんなの…」

桜歌（やめろ…）

三ツ目鬼「喰ったに決まってるだろ??」

桜歌「!!!」

ギリッ!

桜歌「お前——!!」

ダツガキイン!!

桜歌「…くっ!!」

桜歌（硬い!）

三ツ目鬼「無駄なんだよ…無駄無駄…」

桜歌（悔しい…仇を取りたい……）

三ツ目鬼「さて、大人しく私に喰われろ…」

スツ……

桜歌（俺に力をくれ！）

………

桜歌「………」

桜歌（なんだここ…）

辺り一面には桜の木々が生い茂っていた…

カコーン…

??「やっと来たか…」

声がある方を見ると

鎧武者が正座をしていた…

桜歌「誰??」

??「力が欲しいか？」

桜歌「力？」

??「鬼を斬る力が欲しいか？」

桜歌「!!欲しい！」

?? 「……なら私の名前を呼べ……」

桜歌 「名前？」

?? 「そうだ……お前ならもう分かるはずだ……」

桜歌 「!!君は!!」

?? 「行くぞ桜歌! 鬼を退治するぞ!」

……

三ツ目鬼 「今度こそ終わりだ諦めろ小娘——!!」

ヒラ……ヒラ……

三ツ目鬼 「ああ? 何だこれ……桜?

何でこの時期に桜なんて……」

桜歌 「お前には絶対許さない……」

桜歌 「お前は! 俺が斬る!!」

三ツ目鬼 「お前が私を斬る? ははははは!!!

やってみろ! 小娘——!!!」

桜歌 「何度も言わせるな!!

俺は男だ——!!!」

桜歌は刀を抜き

刀身を立て手首を少し内側に捻り唱える

桜歌（力を貸してくれ!!!）

桜歌「…散れ！千本桜!!!」

l l l t o b e c o n t i n u e d l l l

桜歌「自分の周りをよく見てみる!!」

三ツ目鬼「ああ?……桜?」

三ツ目鬼の周りには無数の桜の花びらが舞っていた

三ツ目鬼「これがどうした?」

桜歌「俺の刀はな…名前があるんだよ…

千本桜……文字通り、千本の桜だ…

その花びら一枚一枚が刃となり!

兄^{けい}を切り刻む!!行け!千本桜!!!」

桜歌がそう叫ぶと

今まで舞っていた桜が一斉に三ツ目鬼に

襲いかかる!!!

三ツ目鬼「ハン!こんな花びらこどきで

この私を倒せるか!!!」

三ツ目鬼が花びらを掴もうとした瞬間

……ザクっ!ぶしゅ!

三ツ目鬼「ぎゃああああ!!」

三ツ目鬼の指が斬れ落ちた

三ツ目鬼（なんだ！今何をされた！）

三ツ目鬼は混乱した……今まで飯だと

自分の食事程度しか思っていないなかった人間に対し

「恐怖」を覚えたのだから……

桜歌「お前だけは……お前だけは！

絶対許さない！！」

ズアー!!!

三ツ目鬼「グッ!!!」

三ツ目鬼は堪らず後ずさりした……

三ツ目鬼（な、こ、この私が恐怖しているだと！）

桜歌「やれ！千本桜ー!!!」

ズア……ヒュン！ヒュン！

ズシュ！ザシュツ!!

ズシュズシュズシュ!!

三ツ目鬼「ぐあああああああ!!!」

桜歌（よし!!勝てる！このまま行けば勝てるぞ！）

三ツ目鬼「おのれ！おのれおのれおのれおのれおのれ！

たかが人間風情がー！！

鬼である私をなめるなよおー！！」ビリビリ！！

桜歌「グツ!!」(なんて気迫なんだ!!)

三ツ目鬼「血気術……」

三ツ目鬼の額に横線が現れる

桜歌(な、なんだ……)

三ツ目鬼「鬼刻牢獄!!!」

カッ!!

三ツ目鬼の額に目が生えるこれが

この鬼が三ツ目鬼と呼ばれる理由である

桜歌「……」

桜歌(何だ……何も起こらないのか……)

桜歌「アイツが油断している!!

！行け！せぼ！「ドゴツ!!」…アガア…アア」

いつの間にか三ツ目鬼は桜歌の間合いに入り

腹を殴っていた……

桜歌「……ゴブっ……!!」

な、何が……」

桜歌（いつの間に俺の間合いに

全然見えなかつた?!）

三ツ目鬼「おいおい……どうした!

私の首を斬るんじゃないやなかつたのか?」

桜歌「!!舐めるな!! 千本桜!!」

ズアー!!

ヒュン!!ヒュン!!

桜歌（よし!捉えた!!）

三ツ目鬼「……」ニヤツ

スっ……

桜歌「!!なっ!」

三ツ目鬼は簡単に避けた……

桜歌（嘘だろ……

さつきまでと動きが全然違う何をしたんだ）

三ツ目鬼「くくく……くくく

考えているな?私が今何をしたのだと……」

桜歌「!!うるさい!行け!!」

ズアー!!!!

三ツ目鬼「小賢しい!!」

シュ!!

桜歌「なっ!消え!」「ドゴっ!」がああ!!」「ゴギッ

桜歌「うぐあ!うぐぐ……ゴハッ!」「ボタボタ

三ツ目鬼「ああ……いい音がしたなあ♡

今のは肋骨が折れたか?

脆い脆い……やはり飯はそうでないとなー?」

桜歌「ぐっぐぐ……ゴブっ……」

三ツ目鬼「おいおい……血は捨てちゃダメだ……

お前は稀血なんだからなー

お前を喰えばあの方に血を分けて頂ける……」

桜歌(くそ……くそ……)

俺にもっと力があれば……もっと!もっと……)

三ツ目鬼「おおそうだ……

また、あの不思議な術を使われる前に

両手を潰してしまおうか…」

桜歌（ちくしょう…ちくしょう…

もつと剣を習っておけば良かった…）

ドドドド！「フハハハハハ！！」ドドドド！

三ツ目鬼「そしたら今度こそ…

ゆつくりと喰ってやろう

散々私を手こずらせたお礼になー♪」

桜歌「お母さん…お父さん…」

ドドドドド！「フハハハハハ！！」ドドドドドド

桜歌（な、なんだ…さっきから聞こえてくる

この音は…）

ドドドドドド「猪突猛進！！猪突猛進ー！！」

三ツ目鬼「ああ？」

??「猪突！！猛進！！」

ズバツ！！ズバツ！！

………ブシューー！！

三ツ目鬼「にぎやあああああ！！

ドサツ

桜歌「ぐえっ!」

桜歌「いつ、一体何が…え!!!」

桜歌は信じられない物を見た…

偶然にしろ助けられた事は変わりないので

相手の顔を見ようとした…すると…

桜歌「な、なんで!」

??「ふしゅーふしゅー!」

桜歌「なんで猪ー!!」

??「ああ?なんだてめーは…」

桜歌（喋った…）

桜歌「よ、妖怪さんですか? :カタ:(?。ω。?): :カタ

…: 桜歌は怪談系が大の苦手である

前世もホラー番組を見たら夜1人でトイレに

行けないくらいである…

??「誰が妖怪だ!!女!!」

桜歌「ひいー!!」:(。ω。、):

伊之助「いいか！俺は嘴平伊之助だ！」

桜歌「妖怪さんなのに、普通の名前だ……」

伊之助「だから俺は妖怪じゃねーって!!」ムキー!

桜歌「にやああああ!!近くに來ないでー!」

伊之助「何だとこのや!はっ!

おっと!!」

桜歌「え!!」

桜歌（い、イナバウワーして避けた……

なんて身体の柔らかさなんだ……）

伊之助「んしょ!つと!

へへ……いきなりとは随分威勢のいい獲物だなー!」

三ツ目鬼「貴様……許さぬ……」

私の食事を邪魔する奴は誰であろうと

許さぬぞー!!」

ヒュン!!

桜歌「また、消えた!!

伊之助!気をつけろ!奴は恐ろしく速いぞ!」

伊之助「ああ！俺に指図すんな！つてか
お前は誰だ!!」

桜歌「桜歌だ！」

伊之助「ああ！ぼんきち？

変な名前だな！」フハハ！

桜歌「それ誰ですかー?!」

伊之助「お前じゃねーのかよ！

ん？そこか！おらああー!!」

ブン!!

三ツ目鬼「チツ!!勘のいい奴め」

伊之助「……………おい…びろきち」

桜歌「……………」

伊之助「おい！びろきち!!」

桜歌「もしかして俺か?!」

伊之助「お前以外に誰が居るんだよ！」

桜歌（あつこいつさてはアホだな？）

桜歌「もういいよ……………で何？」

伊之助「お前あの鬼が恐ろしく速いと

言つてたな？」

桜歌「え？うんだつて気づいたら目の前にいるし」

伊之助「それで奴が

速く動いている理由にはならねー

その逆だ……」

桜歌「……逆？」

伊之助「アイツの額の目……

あれが開いてる時、見てる奴の動きを遅くしている

そうなんだろう？」

三ツ目鬼「ほう……私の術を1目見ただけで

見破るとは、唯の獣では無いと言う事だな……」

桜歌「ならやつ目の目を潰せば！」

伊之助「ああ……俺達の動きを遅くできねー……」

桜歌「よし！戻れ！千本桜！」

サーーーーー……

桜が集まってまた、元の刀に戻る

伊之助「…………なんじやそれー!!」

桜歌「え！」

伊之助「お前の刀すげーな！」

桜が刀になるなんてよ！」キラキラ!!

桜歌「あ、ありがとう！って

伊之助俺に考えがある！」

伊之助「ああ？」

桜歌「一緒にやろう！伊之助！

2人でアイツを倒すんだ！」

伊之助「……………」

桜歌「伊之助？」

伊之助「……………」ポワポワ

桜歌「伊之助!!」

伊之助「な、何だ!!早く言いやがれ！」

桜歌「悔しいがまだ、俺の力では

鬼の首を斬る事ができない！」

俺が足止めをするから、その隙に

伊之助が奴の首を斬ってくれ！」

伊之助「……………」

桜歌「アイツは俺の両親の仇なんだ…頼む伊之助」

伊之助「……俺が斬っていいんだな？」

桜歌「!!伊之助!

だがアイツの目は厄介だ!

そこで作戦がある！」

—————戦闘BGM———

ALL side

三ツ目鬼「くそ!くそ!

早く早く稀血を喰わなければ」

三ツ目鬼(そうしないと私がお方にお方に…)

伊之助「フハハハハハハ!

オラア!!」ブン!

三ツ目鬼「くっ!!!しっこい奴め!」

ヒュン!!

伊之助「オラア！」

ガキーン!!

三ツ目鬼「なっ!!」

伊之助「芸がないんだよ! 芸がー!!

猪突猛進! 猪突猛進ー!!」

【我流 獣の呼吸…壱ノ牙 穿ち抜き!!】

ザグッ!

三ツ目鬼「うがー!!

ぐー! 調子に乗るなー!」

ヒュン! ヒュン!!

伊之助「なっ!」

ドゴっ!!

伊之助「うぐっ!!」

バキッ!

伊之助「やろう…また、早くなりやがった!!」

伊之助（……）

桜歌「いいか! 伊之助! 作戦は

単純だ：俺が目くらましをするから

伊之助は」

伊之助「俺は斬るだけでいい！」

伊之助「ん！見つけたぞそこだー！」

三ツ目鬼「ちい！厄介な獣め！」

三ツ目鬼（そういえば稀血は何をしているんだ…）

桜歌「はあはあ…」ズキズキ

桜歌「ぐっ…痛くない…痛くないぞ…」ズキズキ

桜歌「すーはー…」

桜歌「赤火砲じゃダメだ…それに

完全詠唱じゃないと…ハアハア」

桜歌（これが最後のチャンスだ…外したら

もう隙は作れない…伊之助上手くやってくれ）

ガキイ！ガキイン！！

伊之助「オラア！！」

三ツ目鬼「ぐっ！！」

三ツ目鬼（こいつ…今の私では

コイツに勝てん…）

三ツ目鬼「やはり稀血を喰わねば！」

バツ！

伊之助「……は？」

伊之助「あのやろう！逃げやがった!!

つてしまった！桜歌！」

ダダダダ！

桜歌「スーハー…よし！

君臨者よ！三ツ目鬼「見つけたぞ！稀血ー！」

なっ！」

ガキーンー！

桜歌「ぐぐぐ！負けるかー！

散れ！千本桜!!!」

サーーーーー…

桜歌「行け!!」

ザー！シユン！シユン！

三ツ目鬼「それはもう見飽きたわー!!」

伊之助「させるかー!!」

三ツ目鬼「何?!」

桜歌「伊之助!!」

伊之助「悪い!作戦失敗だ!」

桜歌「いいや!ナイスだ伊之助!」

桜歌「君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ

蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ」

桜歌の手のひらに青白い光が集まる

伊之助「……なんだ?」

三ツ目鬼「!!今更その程度でー!」

ダッ!

桜歌「これで目でも潰れる!!」

〔破道の七十三 双蓮蒼火墜〕

桜歌は手の平を前に突き出し解き放つ!

ズアアアア!!!

三ツ目鬼「なに!!!ギヤアアア!」

桜歌「今だ伊之助!」

【 獣の呼吸…参ノ牙 喰い裂き!!】

交差させた二刀を、外側に向けて左右に振り抜く!

ザシユツ!!

三ツ目鬼「ぐびばっ……」

ズツ…ズズ…ゴドッ

鬼の首が斬り落とされた:

桜歌「やった…勝った!勝ったぞ!伊之助!

……あ、あれ?」バタ:

桜歌(力が…足に力が入らない…意識も遠くなってきた……)

伊之助「おい……おい!

こんな所で寝るなんて頭のおかしな奴だな

おっ!あっちの方から強い気配がビリビリ来てるぜ!

ダッ!

伊之助「フハハハハハハ!」

伊之助は走り去って言った:

桜歌(ありがとう……伊之助……俺は……)

そして、桜歌も力を使い果たし…気を失った…
しばらくして…

?? 「スンスン…こつちだ…

ここから鬼の匂いがした所だ」

?? 「無事で居てくれればいいが…」

ガザガサ…ガザガサ…

?? 「あつ居た!!女の子が1人だけか…

酷い怪我だ!彌豆子運んでくれ!」

彌豆子「…」フンフン!!

?? 「よし!すぐ鱗滝さんの所に連れていこう!」

タツタツタツ…

l l l t o b e c o n t i n u e d l l l

斬魄刀を持って鬼退治!! 4話

――桜歌 side

桜歌「んん……はっ！」

ズキン!!

桜歌「あぐっ」

痛い……

??「それはまだ、桜歌には

霊力も経験も浅すぎると言っておるだろう！」

??「……だが現に弱いではないか……

オレの名前すら聞いてないのに

気絶などしおって」

なんだ……

何か話し合い? いや、言い合いをしている

確か……

桜歌「千本桜？」

千本桜「??」「!!」

千本桜「おお！桜歌！気がついたか！

もう身体は大丈夫なのか？！

痛む所はないか？」オロオロ

桜歌「だ、大丈夫だよ！

ありがとう千本桜……」

千本桜「そうか！それか！」

仮面で表情は分からないけど

声を聞く限り喜んでいようだ……

……でも、

桜歌「ごめんね千本桜……」

俺が弱いから上手く君の力を引き出せ無かった」

千本桜「………」

桜歌「俺は君を持つ資格なんて……」

千本桜「!!この！」

千本桜「戯け者め!!」チョップ!!

バシッ!

桜歌「いた!! え?! 千本桜?」

千本桜「最初から剣の達人など居るものか!

最初から完璧な技などあるものか!

どんな達人も努力をし、技を磨く!

それにまだ、

1度しか戦闘をしてないではないか!

1度しか始解をしてないではないか!

それなのに、私の力を引き出せてないだど?!

私を持つ資格がないだど! 笑わせてくれる!

逆に引き出せたでしょう!

【正解】を使っていたでしょう!

桜歌!! お主の身体は力に耐え切れず

あの場で木っ端微塵になっておったわー!!」

桜歌「……千本桜……」

千本桜「……はあはあ……」

??「……千本桜よ……」

お前が感情的になるのも分かる

だが…桜歌もお前のことを思つての事

我らはいい主に出会えて良かったではないか…」

千本桜「…すまない…」

桜歌「あつうん！俺の方こそごめんね！

もつと千本桜の気持ちを考えて話せば良かったよ」

千本桜「修行をするぞ！桜歌！」

桜歌「え！修行？」

千本桜「うむ！このままでは、

先程の鬼よりもつと強い鬼も出てくるはず

それにはまず、桜歌には体力がない

疲れてくれば、剣の速さも落ちる！」

桜歌「なるほど！…よし！俺頑張るよ！！

一緒に頑張ろ！」フンス！

千本桜「その意気や良し！では早速！」

その時桜歌の身体が光始めた

桜歌「えええー！！ナニコレ！

もう修行始まつてるのー?!」

千本桜 「…桜歌自身が目覚めようとしているんだ

桜歌…意識を集中させればまた、私達の所に

来れるはずだ…いつでも私達はお前の力になる

お前は1人ではない…その事を忘れるな…

いつでも私達の名を呼べ」

桜歌 「千本桜…ありがとう！」

俺、目覚めても修行頑張るね！」

ピカーー！

桜歌は消えていった…

千本桜 「……」

千本桜 (お前より…強くなりそうだな…白哉)

?? 「…あれ? 結局オレ名前言っただけか?」

千本桜 「…あっ」

ーー現実ー

桜歌 「んん…」 パチ

?? 「……………」 ジー

桜歌が目を覚ますと

黒髪で先が少し赤く目のくりくりした

女の子が覗き込んでいた：

桜歌「!!わっ!…あうっ?!いつつ!」

??「!!」ムー!フンフン!

桜歌（な、何だ?女の子?

なんで竹なんか啜えてるんだ?）

桜歌「痛ってー…」

??「…フンフン!」ナデナデ

桜歌「あつ、ありがとう…優しいね

俺の名前は鈴燈桜歌…君は?」

??「??」クビカシゲ

桜歌「??」クビカシゲ

桜歌（あ、あれ?あつそうか

竹啜えてるから話せないよね）

桜歌「ねえどうして竹を啜えてるの?

オエってならない?」

?? 「……??」 ジー

桜歌 「……」

?? 「……」 ジー

桜歌 「……ニャー」

?? 「!!! フンフン!」? (>ω<?)

桜歌 「!!? ニャー!」? ・ω・?

スー……トン

?? 「禰豆子……その子の調子はどう……だ」 チラツ

桜歌・禰豆子 「……」 (へ?・ω・?・へ)

桜歌 「あつ」

禰豆子 「……」

?? 「……」

?? 「アハハ! そうでしたか!

俺の妹がすみません」

桜歌 「あついえ! こちらこそ見苦しい物を見せて

申し訳ないです」

?? 「そんな滅相もない！」

あつ俺は竈門炭治郎です！

こつちが妹の禰豆子です！」

桜歌 「ご丁寧にどうも♪

俺は鈴燈桜歌です！」

炭治郎 「俺？失礼ながら

桜歌さんは女の子なのでは？」

桜歌 「男です！」

炭治郎・禰豆子 「!!!」

炭治郎 「え！す、すみません！俺てつきり

女の子だと思つてたので！」

桜歌 「大丈夫ですよ…慣れてますし」ハハハ

炭治郎 「そうですね…あつそう言えば

桜歌さんの近くに落ちてたんで

持つてきたのですが…この刀…桜歌さんのですか？」

桜歌 「あつ」

父 「いいか…桜歌…強くなれ」

桜歌「……………」ポロポロ

桜歌（お父さん…お母さん）ギユ

禰豆子「!!」

トテテテ

禰豆子「ムー」ナデナデ

桜歌「ありがとう…禰豆子ちゃん

この刀は両親の形見なので」ニコッ

炭治郎「…申し訳ありませんでした…」

桜歌「炭治郎さん？」

炭治郎「俺達がもう少し早く着いていれば

ご両親を死なせるところも無かった!

本当に本当にすみませんでした!」

禰豆子「……………」ペコッ

桜歌「頭を下げる必要も

謝る必要もありませんよ…」

炭治郎「桜歌さん…」

桜歌「確かに悔しいです

俺にもつと力があれば良かったと

もつと早く刀千本桜の声を聞いていれば

良かったと、悔いても悔いても

終わりはない：死ぬ間際父は俺に

強くなつてから墓参りに来いと言つてました

だから俺は強くなる！

どんな鬼にも負けないくらい！

俺と同じ目に合っている人の為にも

俺は強くなつて、父と母の墓参りに行く

それが今の俺の目標ですから

だから謝らないで下さい」ニコツ

その時の桜歌の微笑みは

とても男性とは思えないほど

慈悲深く華麗に見えたらしい：

炭治郎「桜歌さん：本当に男ですか？」ジトー

禰豆子「フンフン！フンフン！」ブンブン！

桜歌「！なんでやねん！男つて言つてるよね?!」

桜歌「…俺も1つ良いですか？」

炭治郎「??はい…」

桜歌「禰豆子ちゃんって鬼…ですよね？」

炭治郎・禰豆子「!!」

炭治郎「ど、どうしてそう思いますか？」

桜歌「俺は昔から暗闇でも

眼がよく視えます…

それに今は昼間なのに、この部屋の戸は

閉められ光が入って来ないようにしている」

炭治郎「そ、それだけで禰豆子を鬼というのは」

桜歌「極めつけは、禰豆子ちゃんの歯ですね

牙でしょうか、俺が闘っていた鬼にも

同じ牙が生えてました」

炭治郎「…分かりました…全て話します」

「…かくかくしかじか…

…まるまるうまうま…

桜歌「炭治郎…

よく頑張ったねー!!」↑タメ口おkが出た

桜歌「彌豆子もよく耐えたよー！」

うわあああん!!!」

炭治郎「あ、ありがとう！」

大丈夫だから泣き止んで？」オロオロ

彌豆子「……………」オロオロ

桜歌「うわあーん！」

ガララ！バン!!

炭治郎「あつ！鱗滝さん！」

鱗滝「炭治郎……」

すたすたすた

炭治郎「助かった：鱗滝さん助けて下さい！」

この子全然泣き止まなくて！」

べしっ！

炭治郎「あて！」

鱗滝「女子を泣かせるとは何事だー!!」

炭治郎「えええええー！」

いやいやいや!俺は何もしてないですよ!

それに桜歌は男らしいです!!」

鱗滝「お前はあれが男に見えるのか?!」

炭治郎「本人が言っていましたよ?!」

鱗滝「……!」チラッ

桜歌「ひつく、ひつく」

鱗滝「……」チラッ

炭治郎「……」純粹な眼差し

鱗滝「……」チラッ

禰豆子「??」足パタパタ

鱗滝「……よし…飯にしよう」↑現実放棄!!

――

一同「頂きます!」

桜歌「モグモグ…おおー!」

炭治郎お米炊くの上手いね!」

炭治郎「家は炭屋だったからな!

火の扱いは上手いんだ！」ドヤサ！

炭治郎「それに、桜歌も料理上手いぞ！

このサバの味噌煮は最高だな！」

桜歌「本当ー？♡良かったあ

鱗滝さんですか？」ニコッ

鱗滝「……悪くない」モグモグ

桜歌「良かったです！」

クイツクイツ！

桜歌「ん？」

禰豆子「ムー——！」

※暇——！

桜歌「もう少し待っててねー」ナデナデ

炭治郎「禰豆子も慣れたみたいだな

安心安心♪」

鱗滝「………」

桜歌「………はいっ鱗滝さん♪」おかわりどーぞ♡

鱗滝「!!」

炭治郎「おお！なんで分かったんだ？」

桜歌「え？んー？何となくかな？」

鱗滝「……モグモグ」

鱗滝（娘にしたい）

禰豆子「ムー！ムー！」

桜歌「もう少しで食べ終わるからねー」ナデナデ

炭治郎「そうだぞー禰豆子はいい子だから

待てるよなー？」ナデナデ

禰豆子「ムフーー!!」ニコニコ

一同「ご馳走様でした！」

桜歌「ふー食べた食べたー!!」

炭治郎「俺もお腹いっぱいだー！」

桜歌「あっそうだ！」

炭治郎「雑巾とかないか？手ぬぐいでもいいよー」

炭治郎「手ぬぐいならあるぞ？」

桜歌「ちよつと貸して？」

炭治郎「おう！」

桜歌「ありがとうー」

カチャ：スー

炭治郎「?いきなり刀出してどうしたんだ?」

桜歌「いや、こいつもさ」

今日は色んな事があつたからな：

磨いて血で汚れてるし

綺麗にしてあげないとね♪」

炭治郎「なるほどな♪：んんふあー」

桜歌「先に寝てていいぞ?」

炭治郎「すまん：彌豆子寝るぞつて

もう寝てる」

彌豆子「：：：スースー」Zzz

桜歌「あはは♪俺もこれ終わつたら

寝るから大丈夫だよ!」

炭治郎「そうか?じゃあ先に寝るね

おやすみー」

桜歌「おやすみー!」

スー……トン!

桜歌「……………ふー」

桜歌「明日から修行を頑張ろう!

どんな鬼にも負けないように!

でも、修行って何したら? んー」

鱗滝「それなら……」

びつつくー!」

桜歌「ひゃあ!! う、鱗滝さん?!」

鱗滝「修行なら明日炭治郎と一緒に

鍛えてやる……ではな」

桜歌「あ、ありがとうございます!」

鱗滝「ああ……それと夜は冷える

これを腹の上にかけて寝ろ……」

桜歌「は、はい! ありがとうございます……す?」

桜色の掛布団ー♪

桜歌「あの……これって」

鱗滝「……………」

スー……トン……

桜歌「……これって女の子用では？

まあいいか……寝よう……」Zzz

……

コケコツコー！

ゆさゆさ……ゆさゆさ……

「……きろー……おー」

桜歌「んん……誰？」

炭治郎「起きろ桜歌!!」

桜歌「炭治郎？」

炭治郎「鱗滝さんが呼んでるぞ？

俺と一緒に修行するって！」

桜歌「………めんどい」

炭治郎「え？」

桜歌「……寝る……」

炭治郎「ちよっ！おい！起きろ！

桜歌！桜歌………!!!」

l
l
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
l
l
l

斬魄刀を持って鬼退治!! 5話

——鱗滝・炭治郎・桜歌 side——

桜歌「……………ぐー」

バシツ!

桜歌「きやう!」

桜歌「もー! 炭治郎! 痛いよー!」

炭治郎「桜歌がいつまでも寝ぼけてるからだぞ!

ちやんと集中するんだ!」

桜歌「ちえー」

鱗滝「桜歌……………」

桜歌「はい?」

鱗滝「髪が乱れているぞ……………」

くしくし

桜歌「あ、ありがとうございます♪」ニヤーン

鱗滝 「それに…服もちゃんと中にしまいなさい」

桜歌 「はい!!」

鱗滝 「それから…」

炭治郎 (…あれ?俺の時は…)

鱗滝 「早く滝に入れ」ゲシッ

炭治郎 「うわー!!」

鱗滝 「この岩を斬れ」

炭治郎 「この岩を?!」

炭治郎 「この差は一体…」

桜歌 「炭治郎?どうしたの?」

炭治郎 「何でもない!何でもない!」ズーン

桜歌 「んん?」

鱗滝 「そろそろ始めるぞ…」

桜歌・炭治郎 「あっはい!!」

桜歌 (修業かーした事もないし、どんなのだろ)

鱗滝 「よし、なら山を10週走ってこい」

炭治郎 「はい!!」

タツタツタツ!

桜歌「はい!……はい?」

桜歌(山って言った?)

鱗滝「ん?桜歌よ……どうした?」

桜歌「どうした?……じゃないですよ?!

山?!山ってこの山全部の事ですか!」

鱗滝「そうだ」

桜歌「なんで!死ぬよ?!俺死ぬから!」

鱗滝「?」

桜歌「何言ってるんだみたいな反応しないで!」

鱗滝「行つてこい」

桜歌「……本当に?」

鱗滝「強くなれないぞ」

桜歌「!!」

鱗滝「強くなりたいのだろう?」

ならただひたすらに修業あるのみ」

桜歌「会話聞いてましたね?」

鱗滝 「……………行つてこい」

すたすたすた

桜歌 「ええ?! 本当に行くの?!」 チラッ

山↑ズアア

桜歌 「本当に?」 ガツクシ

千本桜 「行くのだ桜歌!!」 コラー!

桜歌 「ひゃう!」

千本桜 「行かねばならぬぞー!!」

?? 「落ち着くのだ! 千本桜よ!

あつ! ちよつ! 本当止めて! 乱暴しないで!」

桜歌 「……………」

桜歌 「よし行くか!」

1 周目

タツタツタツ

桜歌 「まだまだ、余裕ー♪」

2 週目

タツタツタツ

桜歌「ふっふっふっ」

3 週目

タツタツ…タツタツ

桜歌「ゼー…ふーゼー…ふー」

4 週目

タツタツタツ！…トテトテ

桜歌「……………」

炭治郎「あれ?!桜歌!大丈夫か?!」ペシペシ

桜歌「…うん」

5 週目

桜歌「チーーーーーン」(?—ω—?)

炭治郎「桜歌ーーーー?!」

ーーーーバシャー!

桜歌「冷たいっ!!」

炭治郎「良かった!気がついて」

桜歌「え?!あれ!ここは?」

炭治郎「森で倒れてたんだぞ?」

桜歌「あつそうだったんだ…

ありがとう炭治郎…クチュン！」

炭治郎「このままじゃ風邪引くな

桜歌、服脱いでくれ！」

桜歌「……………」ススス

炭治郎「どうした？早く脱がないと

風邪引いちゃうぞ？」

桜歌「ぬ、脱ぐの？」

炭治郎「脱がないと着替えられないぞ？」

桜歌「いやらしい意味とかない？」

炭治郎「……………」

桜歌「ねえ?!」ハラハラ

炭治郎「あはは！ないゾ？」

桜歌「もー！早く答えてよー！」プク

桜歌「クチュン！」

炭治郎「ほらほら！早く脱いで脱いで！

ほれ着替えね？」

桜歌「はーい……」

桜歌「んしょ……んしょ……」

シユル……シユル……

炭治郎「……………」

炭治郎（あれ？なんだろこの胸の

ザワザワ感は）

桜歌「んしょ！んん！脱ぎずらいー！」ハニャー！！

炭治郎（なんか桜歌を見てると

見ちゃいけないのに見たい衝動に駆られる）

桜歌「ぷはー！炭治郎ー！どれ着ればいいの？」

炭治郎（そもそも桜歌は男なんだし

大丈夫！大丈夫だぞ！炭治郎！頑張れ！）

桜歌「？おーい！炭治郎ー！」

炭治郎「大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫」ブツブツ

桜歌「炭治郎ー!!!」

炭治郎「おお！な、なんだ！桜歌！」

桜歌「もー！着替えどこ？」

炭治郎「あ、ああ!これだよ!

あつ、それとこれも」

桜歌「?なにこれ……桜のピアス?」

炭治郎「鱗滝さんが街に買いに行ったらしい

何でも娘に合いそうだな……って

言つてたな」

桜歌「娘ねー……それって俺の事?!!」

炭治郎「それはないだろー笑笑

だつて桜歌男だしー」

桜歌「だ、だよねー!

でもまー……せつかく貰つたし

付けてみようかな!♪♪」

桜歌「んっしょ!どうかかな?似合う?」

ナレーション「全国の人よ……想像して欲しい

少しボーイッシュな人が

ピアス付けてると何で

あんなに色っぽく見えるのか……

それを間近で見ている炭治郎は

炭治郎「!!」

桜歌「ねーねー! どうかかなー♪♪」

炭治郎「綺麗だ……」

桜歌「おおーい! 聞ってるー!

炭治郎「おおーい! 聞えつてばー!」

その時の炭治郎は語る

あれはもう男には見えないと…

ーーーーしばらくして…

鱗滝「次は剣の修業に移る」

炭治郎「はい!」カチャ

桜歌「ねー! ねー! 鱗滝さん!

このピアスありがとうねー!!

似合う? 似合うかなー!」

鱗滝「早く準備しろ」

桜歌「えー!」

はーい!」カチャ

桜歌（少しは反応してもいいじゃんかー!）

鱗滝（儂の目に狂いは無かった）↑大満足!

炭治郎「桜歌の日輪刀は

俺と同じ黒刀なんだな!」

鱗滝「桜歌お前は呼吸が使えるのか?」

桜歌「呼吸?」

炭治郎「俺は水の呼吸を使えるぞ?」

桜歌「水の呼吸?」

鱗滝「水のように時には緩やかに

時には激しくする呼吸だ」

桜歌「なるほどー……」

んー俺は呼吸は使えないけど

斬魄刀は特殊な刀なんだよー!」

炭治郎「?」

何が特殊何だ?見たところ

普通の刀に見えるけど」

桜歌「ちゅちゅちゅー♪♪

なら見ててねー!!」

炭治郎「見てるって何を」

桜歌は鞘から刀を抜き

刀身を立てて手首を少し内側に捻り唱える

桜歌「散れ：千本桜」

サアアアア

炭治郎・鱗滝「!!なっ！」

炭治郎「ええー！か、刀が！」

刀身が桜が舞い散るように消えた！

どうなってるんだ?!

桜歌「えへへ！どうよ！」

凄いでしょー?」どやさー!

炭治郎「凄いぞ！桜歌！」キラキラ

鱗滝「儂も長く生きてきたが

そんな刀見たことない！」

桜歌「えへへ！びっくりしたでしょー！」

炭治郎「確かにびっくりしたけど

それで攻撃できるのか？」

桜歌「勿論だよー！ほれ！」

桜歌が刀を右に動かすと

桜の東が右に

刀を左に動かすと

桜の東も左に動く

桜歌「ね？」ニコ

炭治郎「す、すごいな……」

桜歌「俺の刃は今や千本あるからね！

花びらに触ったら切れちゃうから気をつけてね！」

炭治郎「千本?!わ、分かった！」コクリ

鱗滝「よし……なら2人とも

各々の刀を持って山を走れ」

炭治郎「はい!!」

桜歌「……やだ！」プイツ!

炭治郎「お、おい！桜歌何言って」

桜歌「だって……また、走るの？」

炭治郎「さつきと違って今度は

刀を持って走る訓練をするんだ

本当に最初は刀が邪魔で、走りにくいぞ？」

桜歌「えー！嫌だなー！」

鱗滝「訓練を頑張ったら

3人に甘い菓子を褒美に買ってきてやる」

桜歌「!!お菓子！」ハワー！」

炭治郎「鱗滝さん?!」(桜歌に甘々だ)

桜歌「本当に甘いお菓子買ってくれるの?」

鱗滝「ああ」

桜歌「おおー!!よしっ!俺頑張るー!!」

桜歌はピョンピョン跳ね回って喜んだ

桜歌「あつ3人分じゃなくて

4人分にして?」

炭治郎「桜歌!!それは失礼だぞ!!

甘い菓子がどれだけ高価なのか知ってるのか!」

桜歌「え!え!え!違うよ!」

だって、3人って、

俺と炭治郎と禰豆子の分でしょー？

それだと鱗滝さんの分無いじゃん！

美味しい物は皆で食べよ？」ニコツ

鱗滝「!!」

鱗滝（なんて良い娘に育ってくれたのだ…）

すつかり親の気分である鱗滝であつた

だが！忘れてはいけない

桜歌は『男』である！

炭治郎「あつ、そうだったのか

ごめん…怒鳴ってしまつて」

桜歌「大丈夫！大丈夫！

さつ訓練開始だー！！

今度は俺が先に行くからね！

戻れ！千本桜！」

サアアア…元の刀に戻る

チャキン！そして鞘にしまう

桜歌「よー！し！出発ー！」

タツタツタツ！！

炭治郎「あつ待つてくれー！！」

ー！ー！山奥ー！

カン！カツ！！カン！

桜歌「もー！ほんつとうに

仕掛けが多い！」

ビュン！ドゴツ

丸太が脇に直撃した

桜歌「うがっ！いてて…はっ！

くっ！」ゴロン！

ザクツ

桜歌「た、竹槍が降ってきた…」

桜歌「それに炭治郎もはぐれちゃったし

ここどこだよ？

もしかして…遭難？」ブルツ

桜歌（は、早く出ないと！）

タツタツタツ！

?? 「やつと見つけたぞ…稀血…」

ブン！

桜歌「!!」

ガキイン!!

桜歌「なっ、お前は！」

?? 「ほう…」

桜歌「何で生きてるんだ?! 三ツ目鬼!!」

?? 「お前に復讐する為さ！」

そこには

伊之助に斬られたはずの鬼がいた

?? 「私が完全に消滅する前に

あの方が来て下さって

血を大量に分けてくださったのだ…」

鬼舞辻「お前…稀血を喰い損ねたらしいな」

三ツ目鬼「ああっ!…お許しください

次こそは…次こそは必ず…」

鬼舞辻「…必ずか？」

三ツ目鬼「必ず…必ずや…」

憎いあの小娘が憎い…

憎い憎い憎い憎い憎い!!」

鬼舞辻「ほう…心地よい、良い怨念だ

良いだろうお前にもう一度

チャンスを与える…もしまた、

喰えなかつたら、私がお前を殺す」

ザクツ！ドバババ！

三ツ目鬼「ああ！ありがとうございます！

ありがとうございます!!」

桜歌「そんな…」

三ツ目鬼「ああ…愛しきお方だ…

冷酷残忍な所もまた、愛らしい

あの目あの声あの仕草

私の心に来るものがある…」ウツトリ

桜歌「何だコイツ」ドン引き

三ツ目鬼「これが人間の言う恋なのか
なあ？小娘よ」

桜歌「し、知らない！てか、俺は男だ！

それに、それは恋じゃない！

支配されているだけだ！

恋とはお互いに愛すること！

一方的な愛などあるものか?！」

三ツ目鬼「チツ！やはり貴様とは

馬が合わぬ！ここで喰ってくれるわあ！」

グアー!!

三ツ目鬼「血気術……」

すう……

桜歌「させるかー!!」

ダツ！

桜歌「散れ！千本桜ー!!」

サアアアー！

三ツ目鬼「なっ！は、早い！」
ザグツグザツ！！

三ツ目鬼「みぎやあー！！」

三ツ目鬼の血気術が発動する前に

桜歌の千本桜が肉を斬った！

三ツ目鬼「貴様ー！！」ボタボタ

だが、傷が浅くすぐに再生する

桜歌「くそ！やはり威力が弱いか！」

三ツ目鬼「もう……飽きた……」

ヒュン！ドゴツ！

桜歌「ぐあっ！」

桜歌（ま、前より速い……それに）

三ツ目鬼「オラ！」

ドゴツ！

桜歌「ゴアア！」ブバツ

桜歌（威力が段違いだ！）

桜歌「ぐっこのー！」

赤火砲!!」

カッツ! ドカン!!

桜歌「へへ! 間近で受けて無傷で済まないだろ!」

煙がはけ三ツ目鬼が姿を現す

そこには…

桜歌「まじ?」

三ツ目鬼「ふふふはははは!

弱い弱い弱いな—!」

無傷の三ツ目鬼が居た

三ツ目鬼「終わりにしてやる……」

ヒュンヒュン! ドゴツドガツバギツ!

桜歌「ぐおっ! あがつ!」

三ツ目鬼「うらあ—!!」

ドツツツゴツ!! ボギツ!

桜歌「!!がはっ!」

桜歌「グギギ……また、肋を狙いやがったな!」

三ツ目鬼「ああ……ああ……

お前を喰えば私は愛される
私を必要としてくれる……

もう私は一人は嫌だ…誰かに傍に居て欲しい」ブツブツ

桜歌「!!隙あり!!」

ブン!!

スカッ!

桜歌「なっ!」

バキッ!ビュン!!

ズガガガ……

桜歌は吹っ飛ばされ

ドガッ!!

桜歌「あがっ!!」

木に打ち付けられた…

桜歌(つ、強くなってる

確実に……俺は誰かの助けがないと

家族の仇も打てないのか)

桜歌「ちく…しょう…」ポロポロ

三ツ目鬼「どおしたー!

もう抵抗はお終いかー?

弱い弱い……所詮は人間などその程度よ」

ズン……ズン……

桜歌「くそっ……」ズギンツ!!

桜歌「いぎっ!」

桜歌(やばい……また、腕の骨が)

三ツ目鬼「きひひひ……稀血ー!」

ドゴツバギ!!

桜歌「うぐっ!ぐあー!」

三ツ目鬼の激しい攻撃が

桜歌を襲う……

バキツ!ドガツ!

桜歌「ぐっ……あが……」ガクツ

三ツ目鬼「ああん……チツまた、

気絶しやがった!

まあいいこれで食べやすくなった……

きひひひ

――

千本桜「桜歌……桜歌！

起きるのだ！」

桜歌「もうダメだよ……全身が痛くて痛くて

動けないよ……」

??「情けない……それでもオレの持ち主か？」

千本桜「おい！そんな言い方！」

??「お前は黙ってろ……」

おい桜歌……鬼は何も

斬るだけじゃなくていい……」

桜歌「……」

??「オレを使え……」

桜歌「ダメだよ……もう力が……」

刀を持つてなれない」

??「馬鹿野郎!!お前の父親は

死んでまであの鬼の

着物を掴んだままだったんだぞ!」

桜歌「……お父さん……」

??「お前は悔しくないのか?

家族を喰い殺した奴が目の前にいるんだぞ」

桜歌「悔しいよ! 本当に……でも

アイツ動きが速くて

俺の力じゃあんなに速く千本桜を

動かせない……」

??「だからオレの力を使え……」

オレの力なら奴がどんなに速くても

関係ねえ……全てを凍らせて終いだ」

桜歌「凍られる?」

??「ああ……俺は氷結系最強だからな……

行くぞ桜歌!!」

……現実

三ツ目鬼「死ね……!!」

桜歌「!!」カッ!

バツ!!

桜歌「戻れ千本桜！」

サアアア…

三ツ目鬼「チツ！あのまま寝ていれば
痛い思いをせずに済んだものを……」

桜歌「はあはあ…お前は……」

お前だけは！俺が倒す！」コオオ

桜歌は霊圧を溜め込む

三ツ目鬼「きひひひ…今更今更……」

お前が何をしようと私には勝てない」

桜歌「それはどうかな？」

お前がどんなに速くても関係ない！」

桜歌（本当に頼んだぞ…）

桜歌「スーハー」

桜歌「《霜天に坐せ！》」

パキパキ…パキパキ!!

桜歌の刀が鞘から徐々に氷に覆われる

桜歌「《氷輪丸!!》」

そして、桜歌の刀は氷の龍となった!

三ツ目鬼「なっ!!」

桜歌「三ツ目鬼!!」

さあお前の罪を数えろ……」

l l l t o b e c o n t i n u e d l l l

斬魄刀を持つて鬼退治!! 6話

桜歌「霜天に坐せ氷輪丸！」

桜歌が刀の名を叫ぶ…すると…

ヒオオ！パキパキ…パキパキ!!ギヤオオ!!!

桜歌の刀がたちまち氷の龍に姿を変えた

三ツ目鬼「な！何だそれは！

何なんだそれはああ!!!」

桜歌「俺のもう1つの力さ…

お前を…：…氷漬けにしてる!!」

三ツ目鬼「はん！どんな力を持っていようが

私には届かぬわー!!」

桜歌「さあて…それはどうかな？」

ヒュン！

三ツ目鬼「消えた！」

桜歌「こつちだ…」

三ツ目鬼「なっ！」

ザグ！ブシュツ！ピキピキ！

三ツ目鬼「ぬぐあー!!」

三ツ目鬼「ふん！こんな傷すぐに治る！」

三ツ目鬼「覚悟しろー!!」

桜歌「ばーか♪お前腕見てみるよ」

三ツ目鬼「ああ？腕だと？」

……なっ！」

パキパキ…ピキピキ…

桜歌が斬った所が氷に覆われる

三ツ目鬼「凍ってる!!!」

桜歌「俺の刀は今、氷結系最強…

腕から段々と氷に覆われやがて全身が凍る

お前はもう終わりだ…」

三ツ目鬼「私が終わりだど〜！

舐めるな…舐めるなよ！小娘ー！」

ぐぐぐ…ブチブチ…

三ツ目鬼は反対の手で凍らされた腕を掴んでそのまま…

桜歌「おいおい…まじかよっ」

三ツ目鬼「うぐぐぐ！があ！」

ぶぢっ！ボタバタバタ…

そのまま引きちぎった…

三ツ目鬼「はあはあ…」

三ツ目鬼「ぐぎぎ！」グググ！

三ツ目鬼「だぁー！」

ズルンつと腕が生えてきた

桜歌「……………っ！うわぁ無茶するな…

痛くないの？」

桜歌（何処ぞの大魔王かよっ）

三ツ目鬼「うるさい！！

この程度の痛みなど！家族を失った

悲しみに比べたら屁でもない！」

桜歌「家族？失った？…何のことだ！」

三ツ目鬼「私は……私はもう!!

1人は嫌だー!!!!」

ズアーッ! ビリビリ!

三ツ目鬼「……………」フシューフシュー

桜歌「ぬおっ!

全く…何か言ったと思ったら

今度は切れるし…訳からん!」

氷輪丸「何かやばい…桜歌…気をつけろ!」

三ツ目鬼「お前ヲ殺ス…」

ドン!

桜歌「!!」

桜歌「やべっ!」

ガキーン!!ギチギチッ!

桜歌「こ、こいつ!身体が大きくなってる!」

三ツ目鬼は倍の大きさになっていた…

三ツ目鬼「シネシネシネシネシネ!」

ググググ!…ギチギチ…

桜歌 「ぐぐー！このー！！凍れ！」

ザグツ！ズアアー！ピキイン！！

三ツ目鬼 「……………」カチコチ

桜歌 「はあはあ……………こわー…」

急に大きくなるんだもんなー…

でも、これで一安心！朝がくるまで待つかな…」

……………ピシッ

桜歌 「！！！」

……………ピシッ！ピシッピシッ！

桜歌 「じよっ…冗談でしょ？

ちよつと！氷輪丸！どゆこと！

氷結系最強なんでしょ！」

氷輪丸 「ああ、確かに俺は氷結系最強…

だが、桜歌……………ただ単にお前の力不足だ」

桜歌 「ストレートに言いやがって！」

ピシッピシッピシッ！！……………バギイン！！

三ツ目鬼 「……………」

おいで…と連呼し出さず

桜歌「くっ！この！巫山戯やがって！」

タタタタタ!!ダンッ!

桜歌は勢いよく飛んだ

そこから一気に刀を振り下ろす

桜歌「くたばれー!!

氷輪丸!!!」

ズアアアアア!グオオオ!

ピキイイン!パキパキ!!!ピシイイン!

辺り一面氷に包まれた

桜歌「はっはっ、はっ

こ、これでどうだ!!」クラッ

ガシャンつと桜歌は刀を落とした

桜歌「はあはあ手に力が入らない…」

桜歌（もし、また、出てきたら

今度こそ殺らるな…）

桜歌「それにしても…娘とは？」

鬼にも家族があるのか？」

氷輪丸「いや、神からはそんな事聞かされてないな…」

桜歌「そっか…」

ガサガサ！ガサガサ！

桜歌「今度はなんだ！」

ガサガサ…ガサガサ！

桜歌「くっ！熊だけは勘弁して欲しい…」

ガサガサ！ガサガサ！

炭治郎「桜歌!!!どこだ！桜歌！」

草を掻き分け、炭治郎が出てきた

桜歌「！炭治郎!!」

炭治郎「桜歌！急に鬼の匂いがして

追っついていく内に桜歌と血の匂いもしたから

心配したぞ！」

桜歌「ご、ごめんね」

炭治郎「怪我は大丈夫か！鬼はどうなった！」

桜歌「鬼なら氷漬けにしたよ」

ほらつと指差す方を見ると

炭治郎「なっ！」

氷の山が出来ていた、その中に

鬼が閉じ込められている

桜歌「たぶんもう出てこれないと思うから

朝になつたら、氷輪丸を解除して

お天道様に焼いてもらおう……」

炭治郎「氷輪丸？」

桜歌「俺のもう1つの、刀の名前さ♪」

炭治郎「本当に桜歌の刀は不思議だな

桜になつたり、氷が出てきたりで」

桜歌「そうかな？えへへ♪

……クラッ」

炭治郎「おっつと！桜歌！」

桜歌「鬼をやつつけられたのと

炭治郎の顔見たらホツとして

力が抜けたみたいだ……笑笑

炭治郎「そうか、頑張ったな桜歌…」

桜歌「うん…：…アイツ俺の両親の仇だったんだ」

桜歌はこれまでの事を話した

炭治郎「仇討てて良かったな…」

桜歌「そうだね…」

――三ツ目鬼 side

寒い…暗い…寒い…

そう言えば、私が家族を失ったのも

こんな寒い日だった…

きやつきやつ！きやつ！きやつ！

子供達の元気な声が村に響いていた

三ツ目鬼↓妃矩「おい♪茜ー！」

茜「あつ！お母さんー！」

タツタツタツ！

ダキッ！

妃矩 「もうすぐ夕飯の時間だから帰りましょ？」

茜 「うん!!」

妃矩 「ほら、お友達にバイバイしてね？」

茜 「バイバイーイー！」

「バイバイーイー！」 「またねー！」

「俺も帰ろー！」 「あたしもー！」

妃矩 「今日は茜の好きな切り干し大根よ♪♪」

茜 「本当！ やったあ♪!!」

お母さん！ 早く帰ろ！ 私いっぱい食べるー！」

妃矩 「そんなに急がなくても

食べ物逃げないわよ♪」

ガララ！

茜 「ただいまー!!!」

妃矩 「はい♪ おかえりなさい♪

手洗ってらっしゃい？

お父さんももうすぐ帰ってくるだろうからね♪」

茜 「はーいーい!!」

妃矩「さて…いっぱい作りますか♪」ムンツ

茜「お母さーんお腹空いたよー」

妃矩「お父さん今日遅いわねー

いつもはもう帰ってくるのに」

妃矩が心配していると

何やら玄関先で、話し声が聞こえてきた…

茜「?誰かいるのかな?」

妃矩「お母さんが見てくるから

茜はここに居てね?」

茜「うん……」

ガラッ!

「ねー♪そろそろ私と夫婦になりましょうよー♡」

「あのな…俺には妻と子供が居ると

何度言ったら分かるんだ!」

「あんな、奥さんよりも

私の方が何倍も綺麗でしょー?♡

胸も大きいし……

貴方のしたい事何でもできるわよ？♡♡
な——んてね——♡♡」

夫「……………」

妃矩（貴方…）

ぎゅつと…妃矩は胸の前で手を組んで

祈る…どうか…どうか…

夫「……………ふん……………くだらん！

俺は乳の大きさに興味はない！

俺は妻の…妃矩の優しさや、愛嬌

何より文無し頃から支えてくれた愛情に

俺は惹かれたのだ！

お前の様な簡単に股を開く様な女の所に

行くなら死んだ方がマシだ！

二度と俺の！、いや！

俺たち家族の前に現れるな！」

女「な、何よ！折角この私が

相手になるって言ってるのに！っふん！」

スタスタと女は行ってしまった…

夫「はぁ」

思わず溜め息がこぼれる

妃矩「貴方…」

夫「っ！」

夫「妃矩…」

妃矩「私は幸せですよ…とても」

夫「聞いていたのか」

妃矩「ええ…玄関先であれだけ騒げば

誰でも聞こえますよ」

夫「むう…」

妃矩「それに…：茜がお腹を空かせて

待っていますよ♪

きつと怒るでしょうね♪」

夫「それは勘弁して欲しいな笑笑」

妃矩「それは貴方の態度次第ですね♪」

ニコッと妃矩は悪戯っぽく笑った

夫「そうだな…帰るとしようか…
俺も腹がへった」

妃矩「ええ♪たくさんありますので
いっぱいおかわりして下さい♪」

「ギリッ」

幸せな家庭に不穏な影が迫っていた…

ある日の事

茜「ゴホゴホ」

夫「おいおい大丈夫か？」

茜「頭いたーい…」

妃矩「お薬買ってきますから

貴方、茜の看病お願いします」

夫「ああ、任せておけ」

茜「お母さん…ゴホゴホッ」

妃矩「大丈夫よ…すぐ戻るからね」

なでなでと茜の頭を優しく撫でる

茜「うん……」

妃矩「いい子ね♪行ってくるわね」

そう言い薬を買いに出かけた

「……………ニヤツ」

妃矩「はあはあ…遅くなっちゃった!」

妃矩（もう!どうしてあんなに人がいるのよ!）

丁度風邪が流行っており

薬屋には多くの人が群がっていたのであった

ブチッ

妃矩「あっ!」

鼻緒が切れてしまった…

妃矩「……………」

妃矩（今日はずいてないわね…）

妃矩は履き物を脱ぎ捨て

裸足で自宅へを急いだ…

しばらくして、ようやく家が見えてきた

だが、

妃矩「??」

何やら玄関に人集りができている

妃矩「……」ゾクッ

妃矩は走り人を掻き分け

なんとか玄関までたどり着く

目の辺りにしたのは……

妃矩「そ、んな」

茜「……」

夫「……」

娘の無残な切り傷と

庇おとして背中を滅多刺しにされてる

夫の姿があつた……

妃矩「いつ……」

妃矩「いやあああああああ!!!」

妃矩「貴方っ！茜っ！」

そんな、そんな！

妃矩「誰がこんな事を!!

お前達か!」

キツと恐ろしい眼差しで

周りの野次馬達を見る

「ちっ、ちげーよ!」「うわこりゃーひでー」

「おい!○○さん達が大変だ!」

早く医者と政府呼んでこい!」

妃矩「茜っ…茜っ…」

ぎゅつと冷たくなつた娘の身体を抱きしめる

妃矩「ごめんね…ごめんね…」

妃矩「辛かったよね…痛かったよね…」

妃矩「貴方…」

痛みに耐えながら守っていたのか

顔が悲痛の表情をしていた…

妃矩「……………」

その時、妃矩の頭には

何故か玄閼先で夫と言ひ争いを

していた、女の顔を思い出した：

「クスクス…良いざまね」（ボソツ

妃矩「!!」

妃矩「お前!!」

女「この度は残念でしたわねー奥様」

妃矩「……………」

女「ちよつと聞いてる？」

全くそれだから、アンタはあの人の妻に

相応しくないのよ笑笑」

妃矩「お…まえが」

女「なに？」

妃矩「お前が娘と主人を…やったのか？」

女「はあ？私か？やってないわよー笑笑」ニヤツ

妃矩「!!嘘をつくなああ！」

「ぎわぎわ…」「おいおい、あの人可笑しくなったのか？」

女「ほらー皆に可笑しい人だと思われるわよ？笑笑

妃矩「うるさい！こっちに来い！」

妃矩は女の髪の毛を掴み引きづる

女「きゃあ!ちよつと!

痛っ!痛い!

妃矩「……………」

妃矩の心はもう、この女の子を

始末する事しか頭になく、

周りの人間が見ているにも関わらず

森の奥へと、

女を連れて行った…

ドサツ

女「きゃっ!」

女「ちよつと!こんな事して

タダで済むとは、…………ヒッ

妃矩「……………」

妃矩の目付きは、人に向けてはいけない

殺意のこもった眼差しをしていた

女「な、なによ！あの人が悪いのよ！

私なんかより、アンタを選ぶから！」

妃矩「……………」グッ

女「死んだ方がマシとか言ってたからお望み通り殺してやったわよ！」

妃矩「……………」ググッ

女「アンタの娘なんか、

お母さーんお母さーんって

泣いてうるさなかつたから、

喉を切ってしやれべれ！つぶぎやつ」

ドゴツと音が鳴るほど、

女の頬を力強く殴る

女「何すん……………へ……………」

妃矩「お前！」

スーと妃矩の額に線が入り

そこから目が開いてくる

2本の角、鋭い牙も生えてくる

妃矩↓三ツ目鬼「お前ーーーーー!!」

ビリビリと空気が震える

女「あ…あ…あつ」

あまりの怖さに女は失禁した……

三ツ目鬼「返せ…」

ズンツ！ズンツ！と女に近づくと

女「いやっ！来ないで！」

三ツ目鬼「娘と…夫を返せーーーーー!!!」

ヒュン!!!

女「たす」

ザジュツと真つ二つに女の身体を引き裂いた

三ツ目鬼「あああああー!!」

哀しみ、悲痛、悔しさが合わさり

言葉にできない感情が心を支配する

三ツ目鬼「そうだ…まだ、生きてるのかも

探せば生きてるの…娘も夫も……

探さなきゃ…探さなきゃ…」

?? 「おや…どうしたんだい？」

三ツ目鬼 「…誰だ…!!」

目の前の男には勝てない…そう直感した

?? 「ほう、私の怖さが分かるのか

少しは賢い鬼のようだな…」

三ツ目鬼 「…」

?? 「私の所に来い…家族に合わせてやろう」

三ツ目鬼 「！本当に？」

?? 「ああ、本当だ、ただし私には

絶対に逆らうな…逆らったら殺す」

三ツ目鬼 「はい…」

それからは、三ツ目鬼は

もうこの世には居ない娘と夫を探した

見かけた幼き少女を見ては娘と錯覚し

娘ではない事が分かると、喰らう

その家族をも喰らう

三ツ目鬼（居ないのは分かってる…でも、

探さなきゃ…人を食べる…私は…)

三ツ目鬼「誰か…:…助けて…:…」

一筋の涙が頬に流れ落ちた…

――

炭治郎「!!」スンスン

桜歌「どしたの？」

炭治郎「あの鬼から、強い哀しみと悔しさの

匂いがする…」

桜歌「??」チラッ

桜歌「泣いてる？」

桜歌は眼が良いので氷の中で

涙を流す鬼を見た

桜歌「何で泣いてるの…」

水輪丸「桜歌…:夜明けだ…」

太陽が顔を出し始めた…:…

桜歌「分かった…

炭治郎もしもの時は頼むね」

炭治郎「ああ任せろ」

桜歌「氷輪丸…戻れ」

パキッパキッと氷が剥がれ落ちる

三ツ目鬼「……………」

太陽に照らされて

鬼の身体が崩れ始める

三ツ目鬼「茜……………」ブツブツ

桜歌「茜？」

桜歌（やっぱり家族がいたのか

俺の事、娘と勘違いもしたし

茜は娘の名前かな……………）

その時三ツ目鬼の腕が動く

炭治郎・桜歌「!!」

カチャつと刀を構える…

炭治郎「??」

桜歌「どうしたんだろ…」

三ツ目鬼「茜……………茜……………」

それは、母親が両手を開け子供が

胸に飛び込んでくる事を待っているようにも見えた

桜歌「……………」

桜歌は三ツ目鬼に近づくと

炭治郎「桜歌!! 何やってるんだ!

危ないぞ! まだ鬼は動いているんだ!」

桜歌「大丈夫だと思う」

ぎゅつと三ツ目鬼に抱きついた

三ツ目鬼「!!」

ぎゅつと三ツ目鬼も優しく抱き返した

そして、一言

桜歌「お母さん」つと言った:

……妃矩side……

暗い……暗い……寂しい……憎い……憎い……

食べなくちや……食べなくちや……

探さなきや……偽物は全部食べなくちや!

突然何かに抱きしめられた……

「お母さん！」

パリンツと音を立てて

真つ暗な空間が割れた

妃矩「え……」

茜「お母さん！」

妃矩「あ……かね？……」

茜「茜なのね！ああ……ああ……茜……」

ぎゅつと強く抱きしめる

茜「お母さん！くすぐりたいよー！」

お腹空いたー！ご飯作ってー！

あつ！あつちでお父さんが待ってるよー！」

茜が指さす方を見ると

妃矩「貴方……」

夫「……」ニコニコ

笑顔でこちらに手を振る夫の姿があつた

茜「お母さん……帰ろ？」

またお母さんの料理食べたい！」

茜は元気よく夫の元へと走って行った

妃矩「やつと…やつと会えたね…」

茜「お母さー！早く早くー！」

妃矩「ええ！今行くわー！」

妃矩（ああ…きつと悪い夢でも見ていたのだろう）

ぎゅー！つと2人を強く抱きしめる

茜「あはは！お母さん苦しいよー！」

夫「……………」ニコニコ

妃矩「ふふふ♪」

妃矩（待っててね…すぐご飯の支度しますね♪）

妃矩「茜！貴方！」

ー！桜歌・炭治郎 side ー

三ツ目鬼「た、た…だ…いま…」

そう言い三ツ目鬼は散っていった…

桜歌「……………ふう」

クラツと身体が寄ろける

炭治郎「つと大丈夫か？」

桜歌「ありがとうくもうへトへトだよー」

炭治郎「よく頑張ったな…さあ帰ろう」

桜歌「うんー！お腹空いたー！」

炭治郎「そうだな！俺も腹いっぱい食べるぞー！」

その後帰宅した桜歌に待っていたのは

禰豆子「ムー！ー！ムー！ー！」ポカポカ

桜歌「いた！痛いちよっ禰豆子！」

鱗滝「全く…心配させおって」

禰豆子と鱗滝にめちやくちや怒られた

桜歌「ごめんっばー！ー！」

禰豆子「ムー！ー！！」

l l l l l To Be Continued l

斬魄刀を持って鬼退治!! 7話

とある山奥に刀と刀がぶつかり合う音が響く

キーン！ガキイ！

桜歌「フツ！」

炭治郎「何の！」

ガキイ!!

ギチギチ……

桜歌「ぬぐぐぐ！」

炭治郎「おおお!!」

鱗滝「……………」

桜歌「ウオリヤア！」

ブン！と炭治郎を突き飛ばし

炭治郎「うわっ」

桜歌「散れ！千本桜！」

始解を発動

桜歌「イケー！」

無数の桜の刃が炭治郎に襲いかかる

炭治郎「!!」

【水の呼吸…参ノ型…流流舞】

水が流れるような動きで

桜の刃を避け、反撃に出る

炭治郎「スウウ」

【水の呼吸…壱ノ型…水面切り】

腕を交差した状態から

勢いよく水平に振るうことで繰り出し

強い威力が出せる

桜歌「なっ！」

桜歌（避けられない！

俺にできるか分からないけど

やるしかない！）

桜歌「縛道の八十一！」

腕を前に突き出し

桜歌「断空!!!」

炭治郎「おおおお!!」

ゴンっ!!と何かにぶつかった

炭治郎「え!」

しかし桜歌の前には何も無い

炭治郎「何も無いのに、

まるで壁の様なものがあるかのように、

動きを止められた!

桜歌「何をしたん…だ?」

桜歌「きゆううー」

目を回して倒れていた…

霊力切れである…:

炭治郎「桜歌?!大丈夫か!」

桜歌「はにゃあー」

鱗滝「今日の訓練はここまで!

桜歌を運んでやれ」

炭治郎「は、はい!

よいつしよつと」

炭治郎（あつ桜歌いい匂い…）

鱗滝（本当は儂が運びたかった…）

――

桜歌「……ん」

千本桜「起きたか」

桜歌「あれ……千本桜？つて事は」

千本桜「うむ……我らの世界だ」

桜歌「やっぱりかー…なんで俺ここにいるの？」

桜歌のこの言葉で

千本桜はお説教モードに入る

千本桜「正座だ……」プルプル

桜歌「え！なんで？」

千本桜「正座だあー！！」

桜歌「は、はい！」チヨコン！

千本桜「何故、私が怒っているか分かるか…」

桜歌「えーと…この前、千本桜の

ウグイス館のお饅頭食べた事？」

千本桜「なぬっ!! あれは楽しみに取っておいたのに
…他には？」

桜歌「……怒らない？」

千本桜「……怒らない」

桜歌「本当？」

千本桜「本当だ……」

桜歌「……こ、この前……千本桜が大切にしてた
鉢植え割っちゃった☆」てへっ

千本桜「なあ！確かに1個足りないなーって
思ってたからお前の仕業か！」

桜歌「怒らないって言ったのにー!
それには、氷輪丸のせいだもん！」

千本桜「なに？」

桜歌「あの時氷輪丸が……」

氷輪丸「よし！桜歌！今から

俺が攻撃するから避けてそのまま

氷輪丸「!!」

氷輪丸の上に居た

桜歌「貰ったー!!!」

氷輪丸「甘いわー!!」

氷輪丸は尻尾を高く上げ振り下ろす

桜歌「うわっ!!」

ドゴツと音を立てて

そのまま桜歌を叩き落とす

桜歌「いっちちちち

はぁ手加減してよー…」

氷輪丸「ガハハハハハ!しかし

よく避けたな…」

桜歌「何かね!こう!速く動いって思ったら

身体がね!羽のように軽くなってそれでね!

ビュンビュンってなったの!」

桜歌は感覚派でもある…

氷輪丸「…:…:そうか!」↑分かってない

氷輪丸（それにしても、瞬歩をやってみせるとはこの調子なら、いづれ卍解も…）

桜歌「よーし！もう一回！…ふん！

あれ？も、もう一回！…ふん！…できない…」

氷輪丸「ん？桜歌！何踏んでるんだ？」

桜歌「え？」

そつと足を退かしてみると

桜歌「何だこれ…鉢植え？」

氷輪丸「や、やべー…それは

アイツが大切にしている物だ…」

桜歌「…：バレなきや犯罪じゃないって

ことわざ知ってる？」

桜歌「つて事何だよー」

千本桜「そうか…：そうか…：氷輪丸は後でピーな…」

桜歌「俺には何も無いの！良かったー…」

千本桜「桜歌はまだ、説教だー！！」

桜歌「わああー！やだー！」

――

ここはとある屋敷

カァー!カァー!

?? 「おや、来たようだね…」

?? 「例の不思議な刀を使う少女の情報ですか？」

?? 「そうだね…今は鱗滝さんの所にいるらしい」

?? 「うむ!!その少女に是非とも会ってみたい！」

?? 「不思議な刀とはな…地味に派手じゃねーか」

?? 「くだらないくだらない…不思議とは

何をもって不思議なのか、俺は信用しない」

?? (女の子なのね…可愛いといいわね♡♡)

?? 「……………」ポヘ〜(あつ…あの雲見たことある…)

?? 「……………ふん…」

?? 「南無阿弥陀仏…南無阿弥陀仏…」

?? 「……………」

?? 「……………ふむ…ならここに呼んでみるかい？」

?? 「お言葉ですが御館様

鬼殺隊でもない者が屋敷の敷居を跨ぐなど

あつてはなりません：」

?? 「うむ!!俺も同じ意見だ!

鬼の刺客かも知れないからな!!」

?? 「もし刺客なら俺が派手に首を

切つてやろう、もう派手派手にな」

?? 「南無阿弥陀仏：南無阿弥陀仏：

おお：可哀想に：名も知らぬ少女よ：」

?? (え?ええ?皆反対なの?)

私は女の子が増えるなら歓迎なのに：) オロオロ

?? 「あらあら：それなら

私の屋敷でしばらく様子を見るのは

どうでしょう?」

?? 「そうだね：頼めるかい：しのぶ」

しのぶ「お任せを」

――

桜歌 「ん…」パチ…

桜歌 「ん。んー！…はあ」

炭治郎 「おっ…目が覚めたか」

桜歌 「はにや…炭治郎…」

炭治郎 「大丈夫か？無理はするなよ」

桜歌 「大丈夫大丈夫…ありがとうー」

禰豆子 「むー？むー？」なでなで

桜歌 「禰豆子もありがと♪」

禰豆子 「むんむん♪♪」

バサバサ!!

桜歌 「え?!か、鴉が入って来たよ！

追い出さないと！」

鴉 「カアー！カアー！」

竈門炭治郎ー！竈門炭治郎ー！

炭治郎・桜歌 「か、鴉が喋った?!」

禰豆子 「むうー!!」

鴉 「竈門炭治郎ー！北西の街へ迎え

そこでは少女が消えている！

そこに潜む鬼を見つけ出し討て！

それが最初の仕事だ！…カー！

それと！鈴燈桜歌！

桜歌「え?!お、俺？」

鴉「お前は柱の1人……

「蟲柱」胡蝶しのぶの元にいけ！」

桜歌「いや行けと言われても

場所知らないし……」

鴉「後で使いがくるから

ついて行け!!」

バサバサ!

素晴らしい鴉は飛んで行った。

炭治郎・桜歌「……………」

鱗滝「……………」

炭治郎「俺の初仕事……」

桜歌「…蟲柱…胡蝶しのぶ…さん」

炭治郎「…とりあえずご飯食べて

明日に備えて寝るか…」

桜歌「そうだね…」

炭治郎「よし!寝るか!!」

桜歌「なんかやる気だね…炭治郎」

炭治郎「まあな!…俺みたいに

鬼に苦しめられてる人達がいるんだ

クヨクヨなんてしてられない…」

桜歌「そつか…炭治郎…無理だけはしないでね?」

炭治郎「ああ 桜歌もその

蟲柱さんと上手くやれよ?」

桜歌「ううー…怖い人だったら嫌だなー」

桜歌（蟲かー…きつと）

蟲柱「言うこと聞かない奴は

脳みそ吸い取るぞー!!」

桜歌「ひいひいー!助けてー!」ガタガタ…

桜歌「こ、こんな人に違いない…」ガタガタ

炭治郎「だっ大丈夫だぞ！桜歌！

鬼殺隊は隊士同士での喧嘩はご法度だから

大丈夫なはずさ！」

桜歌「そうかな…？」

炭治郎「うん！さっ！もう眠ろう…お休み…」

桜歌「うん…お休み…炭治郎」

桜歌（炭治郎はああ言ってくれたけど

クヨクヨなんてしてられないか…

俺も強くないと！よし！寝よ！）

しのぶ「ふふ…桜歌ちゃんですか…

お待ちしますね♪」ニッコリ

——To Be Continued——

斬魄刀を持って鬼退治!! 8話

——翌朝——

チユンチユン…チユンチユン…

鳥の囁きと朝日の眩しさが

部屋を照らす

ああ…朝がきてしまった…

朝なんて来なければいいのに

もうずっと夜でいいのに

炭治郎「朝だぞ…桜歌起きろ」

炭治郎…分かってる…分かってるから

桜歌「もう一度夢の中に——!!!」

炭治郎「ダメだ—!今日は

柱に会いに行くって言われてただろ—!」

桜歌「嫌だ—!!絶対怖いもん!

食べられちゃうもん—!!」

炭治郎「大丈夫だつて！」

桜歌「怖いものは怖いんだー！」

禰豆子「むー！む！む！む！むー！！」

桜歌「ごめん！」

何言つてるか分からない！」

禰豆子「ムーー！」ガーン！

??「あの一」

炭治郎「桜歌！」

禰豆子を悲しませるんじゃない！」

桜歌「うるせー！このシスコン野郎ー！」

禰豆子「ムーーー！」てしてし！

桜歌「いた！ちよっ！痛い痛い！」

??「あの一？すみませーん」

炭治郎「あっ！…禰豆子！」

暴力はダメだぞ！」コラッ！

禰豆子「むー…」シヨボン

桜歌「こら！炭治郎！」

あまり厳しくしないの!!

禰豆子が可哀想でしょ!! もう!

怒りんぼお兄ちゃんだねー禰豆子ー」 ナデナデ

禰豆子「ムー♪♪」

炭治郎「あれ! お母さん?!」

桜歌「誰がお母さんだ!」

ワーワー!! ギャーギャー!!

ガラツと鱗滝が戸を開け

鱗滝「静かにせんか!」

ドゴツと2人にゲンコツをした

炭治郎・桜歌「あいた!!」

鱗滝「桜歌!」

桜歌「はい!」 ビシッ

鱗滝「:隠が来ている」

桜歌「誰?」

??「あつ私です」

スつと桜歌の背後に立つ隠

桜歌「ひにやああ！

え！誰?!わ！敵！味方?!」

——桜歌。パニツク中——

??「違いますよ！私は隠です！

蟲柱様の命により

お迎えにありがとうございました」

桜歌「そうですか、お引き取り下さい」ペこりん

隠「さあ参りま…え！なんで！」

桜歌「わざわざ食べられに

行く奴なんかいるもんか！」プンスカ！

隠「は？食べられる？」

……すみません……どういう事でしょうか……」

炭治郎「なんか、蟲柱様の「蟲」の部分に何かよく分からない妄想をしているらしいのです…
すみません、俺にもよく分からなくて」

隠「はあ……んん！桜歌様……」

桜歌「やだ！」

隠 「蟲柱様の御屋敷には

お菓子があります」

桜歌 「……ふ、ふーん

べ、別にお菓子くらいここにもあるし！」

隠 「更には、外国から取り寄せた

ケーキなる物が」

桜歌 「さあ！行こう!!」キラキラ☆

炭治郎 「それでいいのか…桜歌…」

隠 (チヨロい)

桜歌 「ケーキ♪ケーキ♪」

—————桜歌 s i d e —————

よし！準備OK！

桜歌 「行こ!!」

隠 「はいっ」

鱗滝 「桜歌」

桜歌 「鱗滝さん…今までお世話になりました」

鱗滝 「桜歌よ…経験だ

経験をしてこそ人は成長する

お前は鬼とも戦った

その経験が次に繋がるだろう」

桜歌「…鱗滝さん、俺頑張るよ！

そして、強くなつて、両親の墓参りに行く

その時は、鱗滝さんと炭治郎と彌豆子も

来てよ」

鱗滝「…ああ」

桜歌「じゃあ行つてきます！

鱗滝さん身体に気をつけてね！

お手紙も出すからね！

またねー!!」

鱗滝「……」

桜歌は何度も振り返り手を振った

鱗滝もその場で何度も手を振った

2人とも手を振りあつた

お互いが見えなくなるまで：

隠 「蟲柱様、胡蝶しのぶ様は
女性の方でございます、

同性である桜歌様と、きつと

仲良くなれますよ」

桜歌 「え！待って！

俺男だけでも！」

隠 「へ？…」

ジロジロと隠は桜歌を見る

隠 「桜歌様はご冗談がお上手ですな♪♪」

桜歌 「いやいや！なんでやねん！

男だよ！どう見ても男！」

隠 「顔立ちも良く

髪の毛はピンクのショートで

目はくりくりで、ほっぺも柔らかくて

桜色の髪留めをしてる人を男性とは

思えませんね…

おっと、

もう太陽があんな所に

桜歌様失礼します！」

桜歌「え！なに！きやつ」

隠は桜歌をお姫様抱っこをした

隠「少し急ぎます！」

桜歌「待って！まだ！

心の準備がー！」

ビュンビュンと駆け抜ける

桜歌「いーいーいーやーいーいー！！！！」

隠「お静かに舌噛みますよ！」

いーいーしのぶsideーいー

皆様初めて：胡蝶しのぶです

今日は不思議な力を使うという

少女が来る日です

しのぶ「カナヲ良かったわね

お友達になれるといいわね」

カナヲ「……」

しのぶ「…はあ」

この子にも良い刺激に、なってくれればいいけど

しのぶ「良いですかカナヲ…」

挨拶は人との交流の中で

基本中の基本です

くれぐれも粗相のないように」

カナヲ「……はい」

大丈夫かしら…

アオイ「しのぶ様ご心配なく

私が傍におりますので」

しのぶ「頼みましたよ」ニコッ

ソッ！ ソッ！

おや来たみたいですよ…

しのぶ「さて2人とも行きますよ」

アオイ・カナヲ「はい」

——桜歌 side ——

着いてしまった…

死ぬかと思った…この人速すぎる

桜歌「…キッ

隠「…」ニコニコ

桜歌（睨んでるのに微笑みで返された?!）

「こんにちは♪♪♪」

桜歌「ヒッ?!…ひゃあああ!!!」

桜歌（耳！耳に息がー！くすぐったい！）

桜歌「だ、誰！」

しのぶ「こんにちは♪桜歌ちゃん♪」

桜歌「こ、こんにちは…」

桜歌（綺麗な人…）

しのぶ「初めまして…蟲柱、胡蝶　しのぶです♪

そして、後ろの2人が」

しのぶの後ろから2人の女性が来た

アオイ「初めまして！神崎アオイです！」

桜歌「は、初めまして…」

桜歌（元気な子だ）

カナヲ「……………」ジーツ

桜歌「……………」

桜歌「え、えと、初めまして…」

カナヲ「……………」

スつとカナヲはコインを取り出す

桜歌「え？コイン？」

そして、ピンつ！と上に弾き飛ばす

クルクルと回転しながら落ちてゆき

パンつ！と手で抑えた

結果は〈表〉

カナヲ「…………栗花落カナヲ」

桜歌「へ？」

カナヲ「名前…」

桜歌「あつ！名前ね！よろしくね！

俺は鈴燈桜歌です！

皆様よろしくお願いします！」

しのぶ「長旅お疲れ様です

おや？見たところ荷物が少ないようですが…」

アオイ「確かに…桜歌さん

衣類の替えや、お化粧品など、どうされました？」

桜歌「え…服ならこれを洗濯して回せば

事足りますし、お化粧品なんてしませんし」

アオイ「な！ダメですよ！

女の子なのですから！身嗜みをキチンと

整えて下さい！」

グア！と桜歌の肩を勢いよく掴む

桜歌「何！何！何！」

アオイ「こんな綺麗な髪なのに勿体ない！」

桜歌「待つて待つて！

俺は男だよー!!!」

アオイ「え」

しのぶ「え？」

カナヲ「……!!」

隠「え？」

桜歌「いや!隠さんには

言ったよね?!

しのぶ「そうなのですか？」

隠「はい、まあ道中聞きました

どう見ても女性にしか見えず……」

じくと桜歌を見つめる4人

桜歌「な、何で見るんだよお……」

恥ずかしいよー……/」

しのぶ達「きゅん!♡♡」

アオイ「か、かわいい……本当に男なの？」

しのぶ「癒されますね〜♪」

隠「ホワホワ」

カナヲ「……」なでなで

桜歌「ちよっ!カナヲちゃん?!

カナヲ「……はっ!」

桜歌「あつ！嫌な訳じゃないからね！」

カナヲ「……ん」ニコ

しのぶ「さて！そろそろ家に入りましょう

アオイ部屋まで案内お願いします」

アオイ「畏まりました

桜歌さん。こちらです」

桜歌「あつ！はい！お邪魔します！」

……しのぶside……

ふ……桜歌さんの笑顔可愛いかった

日々のストレスも癒されます

??「今のが例の娘か」

しのぶ「!!」

??「どうした」

しのぶ「どうしたじゃありませんよ……

いきなり背後に立たないで下さい」

??「何故だ？」

しのぶ「何故って……つはあもういいです！」

そのうち皆さんにも、顔出しますので

その時にまたお会いしましょう…富岡さん」

義勇「ああ」

しのぶ「では…」

しのぶ（相変わらず無愛想と言うか

何を考えてるのか分からない人）

しのぶ「…ハア…桜歌ちゃん

後で頭撫でてもいいかしら」

………ALside………

しのぶ「さて！では早速ですが

桜歌ちゃん、アナタの力を

私達に見せてもらっていいですか？」

桜歌「力ですか？」

しのぶ「はい、今回桜歌ちゃんを

ここに呼んだものその力が

果たして人の味方なのか、敵なのか…

見定めさせて頂きます…」

桜歌「……俺は別に敵になるなんて……」

しのぶ「分かっています、

しかし、アナタの鬼殺隊に

入隊するのを、拒否している人がいるのは

事実です……心苦しいかもしれませんが

アナタを見定めさせて頂きます……」

桜歌「……」シヨンボリ

カナヲ「……」なでなで

桜歌「……ありがとう、カナヲちゃん」

桜歌「見せると言っても何を見せたら」

千本桜（なら、始解を見せてやれば良い

私ならば、周り被害が及ぶ事も無かろう）

桜歌（分かった、ありがとう千本桜）

千本桜（礼には及ばぬさ）

桜歌「行きます！」

スーッと小さく息を吸い集中する

しのぶ（恐ろしい程の集中力……）

刀を立て手首を軽く内側に捻り、唱える

桜歌「散れ…千本桜」

サアーと桜が舞い散るかのよう

に刀身が上から消える

しのぶ・アオイ・カナヲ「!!」

3人とも口を開けたまま

ただ見ている事しか出来なかった

しのぶ「綺麗…」

アオイ「はい…」

カナヲ「…」目キラキラ？

桜歌「まだまだー!! ♪♪」

桜歌「っほい！」

桜歌が刀身のない鞘を左に動かすと

宙を舞っていた桜も左に右に上に下にと

動かしただけで飛んでいく

しのぶ「凄いですね…これほどとは」

アオイ「本当に綺麗な桃色ですね…」

カナヲ「……」

スッとカナヲが桜を触ろうと手を伸ばす

桜歌「カナヲちゃん！危ない！触らないで！」

カナヲ「!!」

桜歌「俺の千本桜は桜だけど

それは刀身を桜に変えただけ

桜の花びら一枚一枚が刃なんだ

もし迂闊に触ったら切れちゃうから気をつけて」

しのぶ「この無数の花びら一枚一枚が……」

カナヲ「……ごめん」

桜歌「ん！大丈夫大丈夫」ニコニコ

しのぶ「!!」

桜歌「しのぶ様？さん？どうしました？」

しのぶ「しのぶで良いですよ？」

桜歌「……しのぶさんで

それで何で驚いてたのですか？」

しのぶ「あ、ああ、いえ、何でもありませんよ」ニコツ

桜歌「そうですねか…

よし、戻れ千本桜」

サーと元の刀身に戻る

アオイ「先程もその千本桜と

仰っていました、何か意味があるのですか？」

桜歌「うん！この刀の名前なんだ」

アオイ「刀に名前…ですか…」

アオイは少し眉を寄せて考えこんでしまった

桜歌「そ、そんなに難しく考えないで

俺と刀は心で繋がってるって

思ってくればいいよ！」

アオイ「…わかりました。

では、私は晩御飯の準備をしてきます」

とスタスタと台所に向かっていった

桜歌「何か怒らせちゃったかな…」

しのぶ「大丈夫ですよ♪あの子は少し

気難しいだけです♪

それよりお腹空きましたね♪

私達も中に入りましょう♪」

桜歌「そうですね♪俺もお腹ぺこぺこです♪

カナヲちゃんも行こ！」

カナヲ「…うん」

しのぶ「あつその前に桜歌ちゃん」

桜歌「あの、だから俺は男なのでちゃんはちよつと…」

しのぶ「そんな事より」

桜歌（そんな事?!）

と桜歌が思ってる時、頭に何か乗っかる

桜歌「え？」

しのぶ「思った通り髪の毛サラサラですねー♪」

しのぶが桜歌の髪を撫でていた

桜歌「あ、あ、あのその！」

恥ずかしい…です…」

顔が真っ赤である

しのぶ・カナヲ「!!!」

しのぶ（か、可愛い！さっきの

あの人へのイライラが無くなっていく！）

カナヲ（可愛い可愛い可愛い）

カナヲ「私も」

なでなでなでと凄い速さで撫でる

桜歌「ちよっ！カナヲちゃん！

やめ、やめ、」

アオイ「3人ともお食事の…って！

何やってるんですか!!!」

桜歌「良かった！アオイさん助けっ」

アオイ「私も撫でたいです！」

桜歌「ええ！待ってご飯食べよ！

お腹空いたよー！」

アオイ「いいえ！ご飯の前に

撫でないと、死んでいきます！」

アオイの目は血走った鬼の目をしていた

桜歌「そんな訳あるかい！

びっくりもしましたけど

しのぶ「あの刀」

昼間に桜歌ちゃんが見せてくれた

刀の力とでも言うべきか

何にせよ…

しのぶ「本当にこちら側の味方で良かった」

それに

桜歌ちゃん可愛い過ぎて辛い

髪の毛サラサラで同じ女性としては

羨ましい限りです…

しのぶ「さて…私も、そろそろ寝ましょう」

普段は【鬼】の存在を気にして

日常を楽しめなかったけど、

しのぶ「ふふ♪明日は何をしましょうか♪♪」

t
i
n
u
e
d
?

??
t
o
b
e
c
o
n